青山同窓會報

《 発行所 》
青 山 同 窓 会
〒951-8127 新潟市中央区潟屋下川原町2-635
新 潟 県 立 新 潟 高 等 学 校 内
TEL 025-266-5268
FAX 025-266-5268

《 編集・発行人 》
長 谷 川 義 明

《 印刷所 》
オリオン印刷株式会社
〒950-0963 新潟市中央区南出来島1-19-1
TEL 025-283-2151
FAX 025-283-3804

新年のご挨拶

青山同窓会会長　長谷川　義明（61回）

新年おめでとう御座います。

青山同窓会会員の皆様におかれましてはお健やかに新春をお過ごしのこととお慶び申し上げます。

昨年は秋になってもいつまでも暑い日が続き紅葉が随分遅れましたが、晩秋になって急に寒波が訪れて降雪が早いという不順な気候となりました。体調の維持に大変気を使われたことと思います。実際世界的にもあちこちで大雨、強風、山林火災など異常気象による大きな災害が報道され、地球環境保全のための行動が待ったなしに要求されているという認識が強まった年でありました。

今年は首脳国サミットも地球温暖化問題が主要課題となるようですし、新潟市でもゴミの収集方式が十三分別に細分化されるなど環境保全の意識がいっそう高まる年となりそうです。

昨年の青山同窓会の活動につきましては新年会をはじめ、総会、学術文化講演会などの諸行事に多くの会員の皆様のご参加を頂きまことに有難う御座いました。特に総会におきましてはおよそ七〇〇人という多数の参加を頂いており、素晴らしい盛り上がりのある会となっております。各期幹事の皆さんのご努力によるところが大きいのですが、世代を超えた同窓の誼みということだけで優れた先輩や才ある後輩たちと一緒に話が出来る素晴らしい機会となっていると嬉しく思っております。

学術文化講演会におきましては77回卒の上原誠己氏による三味線弾語りの義太夫を楽しませて頂きましたが、流石に大阪文楽座で長くプロとして活躍されただけに素晴らしい語りで堪能致しました。また県の醸造試験場長82回卒の渡辺健一氏からは、淡麗辛口の新潟の銘酒の特色などのお話を伺いましたが、酒蔵の指導など酒どころ新潟を支える大切な試験研究機関として立派に機能を果たしておられると感じました。

二〇〇九年のＮＨＫ大河ドラマに83回卒の火坂雅志氏原作の「天地人」が採択されるとの発表があり大変嬉しいニュースでした。小説の主人公直江兼続は越後統一の将、上杉景勝の軍師役といったところですので新潟の各地がテレビで紹介されることになることでしょう。全国に居られる新潟関係者にとっても懐かしい場面が多く画面に出るのではないでしょうか。青山同窓生がこういった分野でも活躍しておられることは大変嬉しいことです。

まさに多士済々の同窓生の活躍ぶりに大変誇らしい思いを持ちますが、どうか本年も会員各位のご健勝ご活躍と幸多き年でありますよう祈念申し上げます。

新年のごあいさつ

衆議院議員　吉田　六左エ門（66回）

青山同窓会の皆様、新年明けましておめでとうございます。

旧年中は、一方ならぬお世話になり有り難うございました。本年も相変わりませずよろしくお願い申し上げます。

昨年七月、本県で発生いたしました、中越沖を震源とする「新潟県中越沖地震」は、多くの尊い命と貴重な財産を奪い、柏崎市や刈羽村などの各地で甚大な被害をもたらしました。あらためて亡くなられた方々にお悔やみを申し上げますとともに、被災された皆様に対しましてお見舞い申し上げます。

青山同窓会新年会のお知らせ

青山同窓会会長　長谷川義明

明けましておめでとうございます。恒例の青山同窓会の新年会を開催いたします。

普段会えない方々と大いに歓談して頂きたいと存じます。

開催要領は右記のとおりです。各期幹事の皆様からも同期の方々に連絡をしていただきたいと存じます。また参加を希望される方はお誘い合わせて事務局までご一報ください。

青山同窓会事務局：
電話／FAX　025-266-5268
青山同窓会電子メール アドレス
niigata_aoyama@yahoo.co.jp

記

日時：平成 20 年 2 月 15 日（金）
　　受付　午後 6 時
　　開宴　午後 6 時 30 分～
会場：新潟グランドホテル
　　TEL 025-228-6111
会費：6,000 円

今後も被災者の皆様の住宅をはじめとする生活の再建、安定した雇用の場の確保と産業の振興、安全な地域づくり等、一日も早い復興に向けての取り組みに全力を尽くしてまいります。

昨年の参議院議員選挙は、与党にとって大変厳しい結果となりましたが、同窓である佐藤信秋さん(前国土交通省事務次官)が比例区から見事に当選を果たされました。皆様からいただきました熱き絶大なご支援に、この場をお借りして私からもあらためて御礼申し上げます。

お陰様で、昨年の八月三十日までの約一年間、国土交通大臣政務官として務めさせていただき日本のため、ふるさと新潟のために全身全霊を懸けて政務官の任にあたってまいりました。その間、能登半島地震や中越沖地震等の災害対応、建築士法等の一部を改正する法律案成立、新潟の関連事項では松浜上流橋事業の着工、新潟市オムニバスタウン指定書の交付(バス交通の利便性向上に対し、国が重点的に支援する制度)、新潟海岸(歌衛町)直轄整備事業の採択・起工、新潟東港コンテナターミナル整備事業決定等、これまでの経験や人脈を活かして自分なりに精一杯努力し少なからず、国民・県民の皆様のお役に立つことが出来たのではないかと自負しております。

党務においては、地方経済の依然として厳しい実情に目を向け、中小・零細企業の再生に手を差し伸べるべく党国会議員による「地域・中小企業再生若手議員連盟」を発足させ、会長を私が仰せつかっております。

日本の経済や雇用を支えているのは地方の中小・零細企業であり、地域経済の活性化なくして国の活力はありません。頑張る地方の皆様を支援する為の議論はもちろんですが、具体的施策を打ち出し実際に現地に赴き支援をしたいと考え、多くの議員の賛同を得て「行動する議員連盟」として活発に活動しているところであります。

私は、将来のあるべき新潟や日本の姿を想う時、青山同窓会の皆様が、グローカルに、官、民に限らずあらゆる分野でご活躍されておられますことを大変心強く、また、励みにさせていただいております。

本年も、「新潟を元気に、日本の地方を元気に」の私の信念のために、引き続き大所高所からのご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、同窓会皆様のますますのご健勝ご多幸をお祈り申し上げ、新年の挨拶とさせていただきます。

災害に強いふる里づくり

参議院議員　佐藤　信秋（74回）

青山同窓会の皆様、明けましておめでとうございます。

昨年は、大変お世話になり、誠に感謝に堪えません。多くの皆様から、同窓生、の誼をもって多大のご支援を頂きました。青山、の暖かさをしみじみ感じさせていただきました。

一昨年七月、三十四年余り勤めた国土交通省を退職いたしました。足腰の強い地域づくり、国土づくりに邁進した毎日でした。そもそもこの職業を選んだきっかけは、高校二年生の時に体験した新潟地震でありました。「地震に負けないまちづくりをしよう」と土木工学を志し、三十四年余、それなりに初心を貫くべく、努力しました。

ところが、いよいよ仕事もリタイアしようか、という平成十六年七月には三条見附の大水害、十月には中越大震災が生じました。たまたま防災対策の事務方の責任者として、技監、事務次官の職を勤め、一日も早い復旧、復興を、とふる里新潟の皆様と力を合わせながら、「まだまだ防災体制が水準としても、また制度としても不十分」との思いを一層強く感じました。

平成十八年になると、地方の疲弊、都市と地域の格差の増大が、大きな声で叫ばれるようになりました。私が目指してきた災害に強い国土も、このままではもとの黙阿弥になりかねません。災害常襲国日本は、それでもずいぶん体質強化がされてきました。ところが、地球温暖化の現れなのか、雨の降り方がおかしくなっています。降る、降らないの変動が激しくなっています。至る所で大地震の懸念も強まっています。さまざまな方策、政策を総動員しなければいけません。縦割りの行政では限界がある。そう考えた私は、政治の世界から、最後のご奉公と、思った次第です。〝安全で美しいふる里をつくろう〟と呼びかけて、全国に同憂の士を募り歩きました。たくさんの青山同窓生のご支援を頂きました。ところが、選挙期間の最中に、中越沖地震が起きてしまいました。亡くなられた方々や被災された方々に心からお悔やみを念じながら、全国を回りました。

現在は、予算委員会や災害対策特別委員会に所属して、〝安全、安心のふる里づくり〟を提唱、実践にいそしんでいます。時間が取れれば、全国を飛び回る日々でもありますが、たまたま新潟高校の真ん前に空き事務所があったので、新潟にも連絡所を置きました。新潟に帰ると、事務所から学び舎を眺めて、初心忘るべからず、と気を引き締め直しております。

新年のごあいさつ

衆議院議員　鷲尾　英一郎（103回）

あけましておめでとうございます。

旧年中は青山同窓会の皆様には大変お世話になりました。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

昨年は、私の選挙区内でもあります柏崎・刈羽地域が、中越沖地震により大きな被害を受けました。青山同窓会の皆様からも多大なるご支援を頂戴し、衷心より御礼を申し上げる次第です。

また、昨年の参議院選挙においても多大なるご支援を賜り、参議院にて民主党は第一党の座を占めることができ、またその結果として、被災者生活再建支援法が、懸案だった遡及適用事項を含めて可決されたことは、被災地域、被災県選出の議員として、皆様へいくばくかのご恩

返しができたのではと思っております。

近年の政治状況を省みますと、少子高齢化に伴う国家財政の悪化には目を覆うものがあります。政局の動向に関わらず、今こそ現実を直視しなければならないと痛感する思いです。

直近のデータで、社会保障費は前年比約二兆円増加する一方、政府の義務的経費および交付税交付金、国債費を除くと既に政府の裁量的経費は十五兆円しかありません。つまり、公共事業費をいくら減らしても、交付税をいくら減らしても、年々増加する社会保障費の動向を考えれば、もはや無駄遣いを減らし続けても、思ったほどに削減の余地はありません。では、一足飛びに増税か？というとそんなことはできないのであります。

国家財政の問題は地方格差の問題、ひいては教育の問題にも密接に関わっております。今年の東大入学者数の上位三十校のうち地方の公立高校はたった五校しかなく、それもすべて理数科などの特別授業を設けている高校のみです。地方の疲弊と教育格差はまさしく相関するといってよいでしょう。

歴史を紐解きますと、吉田松陰はじめ維新の志士を多数輩出せしめた偉人、山田方谷先生は、財政再建の要諦を財政の外に求めて、人材の大事さを訴えました。また備中松山藩の財政立て直しにあたり、大阪商人に対し一切を明らかにして藩財政の再建計画を認めさせたといいます。

この点、昨今の官僚の不祥事、社会保険庁や防衛省の情報の隠蔽操作には考えさせられるところがあります。国家の役人の不祥事はひるがえって国家国民の問題であります。

また例えば、消費税を内税方式に変更し、今、道路特定財源を一般財源化しようとしている動きは、消費税を内税にすれば負担感が減るとか、道路特定財源の暫定税率を下げれば二度と税率を上げられなくなるとか、そんな官僚の思惑が見え隠れしています。

適切な情報開示と選択肢があれば、きっと日本国民は増税だって受け入れるだろうし、日本国民は歴史的にそのような選択をしてきたはずです。

私は日本の民主主義を信じたいと思います。財政問題にあたり、大事なのは情報開示とそして教育であると確信しています。

紙幅も限られており、皆様にご挨拶申し上げなければならない事項はたくさんございますが、兎にも角にも、青山同窓会の皆様に恥じることのない活動をしてまいる所存です。

本年も何卒、ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

新年のごあいさつ

新潟市長　篠田　昭（75回）

青山の皆さま、新年明けましておめでとうございます。昨年は新潟市にとって政令指定都市を船出させる記念すべき年とさせていただきました。

幸い、概ね順調にスタートを切ることができました。その理由としては、まず景気が地方でもやや明るさの見える時期に当たったこと。東アジアの時代が幕を開ける中で物流などの面で日本海側に軽いフォローの風が吹いていることが挙げられると思います。

また、雇用の創出に大きな効果のある企業立地や、まちづくりで政令市効果を良い形で出すことができたと思います。

今年は五月の「G8サミット労働大臣会合」や六月の「日中経済協力会議」、両陛下にお出でいただく九月の「全国豊かな海づくり大会」を成功させ、〇九年の「大観光・交流年」に結びつけたいと考えています。

〇九年は一月一日が「新潟港開港一四〇年」の節目に当たり、新潟市出身の火坂雅志さん（青山83回）が原作を書かれた「天地人」が大河ドラマとして放映されます。さらに秋には二巡目国体、十月から十二月はJRの「デスティネーション・キャンペーン」も行われますので、大いに新潟市をアピールする年にしたいと考えています。

しかし、一方では昨年七月の中越沖地震で大変な風評被害に遭い、今後もかなり尾を引くことが予想されますので、新潟市をより明確にアピールするため、〇九年の大交流年に合わせて「水と土の芸術祭」を開催することにしました。

日本一の水量と延長を持つ信濃川、そして日本有数の水量と清流度を有する阿賀野川に育まれた新潟市は、全国のどこにも負けない「水と土の文化王国」と考えます。

新潟市では「水と土の王国」である「越後田園文化」が世界文化遺産に申請できないかを検討するとともに、芸術祭を八カ月程度の長期間開催することを検討しています。

〇九年以降、新潟市で三年に一度素晴らしいアート作品を制作・展示し、世界一流の「水と土の美術展」を開くことで、私たちの誇りとする「水と土の暮らし文化」を国内外に発信していきます。今年から準備に取りかかりますので、さまざまなご助言・ご提案をいただきたいと思います。今年もよろしくお願いします。

十九年度　青山同窓会総会

現職員　中村　有里（95回）

十九年度は本校吹奏楽部四十三名の演奏によって幕開けしました。本校職員でOBの五十嵐公先生の指揮による「ストリートパフォーマーズマーチ」で参加された皆さんをお迎えしました。部長の佐藤亜里沙さんは「『楽奏』（合奏）にかけて楽しく音楽を奏でようという造語だそうです）を目標に八月四日の県大会に向けて練習しています。」と決意を述べました。（同窓の「がんばれ」のエールのおかげか県大会金賞、西関東大会で銀賞。）さわやかで熱意あふれる三十分ほどのコンサートの後、総会が開会しました。

長谷川同窓会長より「（演奏で）元気を頂いた。来年は六十回以来の全県一区入試が行われる。また優秀な生徒がやってくる。今回は一層、貴重な会だ。」とのご挨拶がありました。猪又教頭より運動部、文化部の活躍、進路状況の報告（フェンシングの遠藤さんほか）があり「部活動、進路の成果は同窓の熱いエール、あたたかい支援によるものである。」と感謝の辞がありました。続いて74回生　池一さんより、東京青山同窓会と新

人歓迎会の報告がありました。新潟市長　篠田昭さん（75回）より「政令指定都市の効果を一刻も早く実感してもらえるようにしたい。」とのご挨拶がありました。

長谷川会長議長のもと、議事は滞りなく進み、全て承認されました。

91回生　早川祐子さんの司会により懇親会へ進み、長谷川会長、衆議院議員の吉田六左エ門さん（66回）、鷲尾英一郎さん（103回）のご挨拶をいただいた後、50回上村光司さんのご発声で乾杯し、にぎやかに懇親会がスタートしました。懐かしい顔ぶれがそろい、しばし歓談が続きました。（この席で第95回生の二十周年記念同期会の開催が決まったようです。何と有意義な会。）

平成十九年度総会の締めとして、84回生　行田充さんの指揮で“ますらお”を歌い、64回生　風間士郎さんの万歳三唱で無事閉会いたしました。

東京青山同窓会　平成十九年度総会

東京青山同窓会事務局長　日下部　朋子（82回）

平成十九年十一月二十二日（木）、十九年度の総会がANAインターコンチネンタルホテル東京にて開催されました。

新潟からは長谷川義明青山同窓会会長（61回）、富山修一同幹事長（75回）、横堀真弓校内幹事（91回）、さらに公務のために上京中であった篠田昭新潟市長（75回）が急遽ご参加くださいました。

まず、栗林貞一東京青山同窓会会長（59回）のご挨拶で当会の近況と会員の皆さんのご協力への感謝、佐藤信秋参議院議員（74回）と鷲尾英一郎衆議院議員（103回）の出席を受け、青陵健児として社会に貢献できる喜びと期待を述べられました。続いて長谷川会長、篠田市長から新潟の近況を伺い、横堀先生より学内の様子をご報告いただきました。遠路お越し頂きありがとうございました。

引き続き総会議事では、小職より会務報告、佐藤茂会計幹事（77回）より会計報告がなされ承認されました。

高橋奈都子学年幹事（112回）が春に引き続き歯切れの良い司会で進行した第一部を終え、第二部懇親会は同じく112回の笠井淑裕学年幹事に司会を引き継ぎ、小林元雄副会長（61回）の乾杯で幕を開けました。

歓談の合間には佐藤、鷲尾両議員のスピーチもあり、公務では真剣な働きぶりと拝察いたしますが、当夜は同窓諸氏に囲まれて寛いだ様子が印象的でした。

恒例となった『卒回別出席者数コンテスト』は野球部OBの名コンビ佐野栄二（83回）、星野紹英（84回）両学年幹事の司会でベスト三の発表ですが、上位五チームの人数が切迫しており、豪華（？）賞品を巡ってあわやの大乱闘。が、そこは迷司会二人の大岡裁きで、一着112回九名、二着115回九名（頂上決戦は何とジャンケンでした）、三着は113回と114回の同数八名で痛み分け、あと一歩の次点が59回七名ということで一件落着。それにしても、112回～115回の学生四期合計で三十四名という出席数は若手の台頭を表していて頼もしい限りですが、社会人の先輩諸兄にもう少しご参加いただきたいものです。

さて、終盤の校歌（島津孝・84回、長谷川翼・115回）、応援歌（成澤祐太・114回）そしてエール（星野紹英・84回）と続き、池一幹事長（74回）の閉会の辞となりました。もちろん二次会も五十名近い参加者を得て大盛況。赤坂の夜がエビ茶色に染まっておりました。

参考までに各回の出席者数を記載します。

回【人数】	回【人数】	回【人数】	回【人数】	回【人数】	回【人数】	回【人数】	回【人数】
46【1】	64【5】	71【1】	75【4】	82【2】	90【2】	107【1】	112【9】
59【7】	65【1】	72【1】	76【2】	83【1】	98【2】	108【1】	113【8】
60【1】	67【1】	73【1】	77【2】	84【2】	103【1】	109【3】	114【8】
61【5】	68【1】	74【5】	80【2】	85【1】	104【1】	110【1】	115【9】

関西青山同窓会開催

校内幹事　押木　洋（87回）

十二月八日（土）、今年で九回目となる「関西青山同窓会」が、大阪新阪急ホテルで開催されました。新潟から参加した長谷川会長、石田副会長などを含め、五十一名が出席し、例年に劣らぬ盛会となりました。

開会に先立ち、司会の渡辺友昭さん（83回）より火坂雅志さんの「天地人」のＮＨＫ大河ドラマ化の紹介がありました。最初に関西青山同窓会会長である佐藤幸治さん（64回）よりご挨拶があり、梅原猛氏が自著の中で親鸞、日蓮、良寛の思想を越佐の地が育んだことを激賞していたことを紹介し、郷土への思いが熱く語られた後、九年にわたって務められた会長を退任し、新会長に渡辺操さん（66回）を推薦したいとのご提案がありました。併せて新しく副会長に高橋貞夫さん（65回）、監事に乙川真理さん（83回）が推され、拍手をもって了承されました。役員になられた方々と事務局の松本和彦さん（83回）から、今後ますます会の発展に尽力していきたいとの挨拶があった後、内山準之助さん（58回）の音頭で乾杯し、懇談となりました。毎回立食形式で行われるこの会は、すぐに和やかな雰囲気となり、あちらこちらで近況報告や懐かしい話に花が咲きました。今回は残念ながら若い現役学生の参加が少なかったのですが、参加した学生の周りには常に人の輪ができ、多くの先輩方が温かなアドバイスをされておりました。

さて一通り懇談がすすんでいった後に、長谷川会長をはじめとする新潟からの出席者の挨拶、母校の近況報告が続き、昨春入学した大学一年生の自己紹介、そして関西青山同窓会神戸分会を開いてさらなる交流を深めている方々の報告や83回に続いて出席者の多かった79回の方々のスピーチなど、会は楽しく進行し、あっという間に二時間が過ぎていきました。そして旧校歌、新校歌、「丈夫」を野球部のＯＢである伊藤洋介さん（83回）、大倉喬之さん（104回）、成澤良さん（105回）の指揮で斉唱し、最後に副会長の西脇重孝さん（63回）からユーモアあふれる英語落語のご紹介があり、西脇さんの音頭で一本締め（一本締めは関西が本家だそうです）でお開きとなりました。お開きになった後も語り尽くせぬ思いを話すべく、梅田の町へとたくさんの方々が繰り出していかれました。たいへん和やかで有意義な大阪の夜となりました。

青山同窓会ＨＰ　運用状況について

広報委員会・ホームページ部会　五十嵐　公（81回）

同窓会のホームページを開設しておよそ一年が経過しました。現状と課題について若干の報告をいたします。

同窓会ホームページは、昨年四月に試験運用を開始し、七月の総会における規約改正によって広報委員会の中にホームページ部会を設置することが承認され、正式運用を開始しました。現在（十一月末）で、アクセス数はおよそ一万二千となっており、時期によって多少の変動はあるものの、およそ月平均千件ほどのアクセスということになります。

内容については、同窓会主催事業の案内と報告、懐かしい校歌と応援歌の歌詞一覧、同窓会報のＰＤＦ版によるバックナンバーなどが中心となっております。特に事業の案内については、内容が固まり次第掲載するようにしておりますので、同窓会報などより早く情報を知ることができるものとなっており、ご覧いただいた方々からはご好評をいただいております。

これからは、インターネットの利点である「情報の即時性」を発揮できるように、特に事業開催後の報告を早めに掲載していくこと、より一層の内容の充実をはかり楽しんで見ていただける内容を用意することの二つを課題に、運営してまいりたいと思います。

また、「青々会」のような若手の集まり、また同窓各期で開設した独自のホームページなどについては、特に問題のない限りリンクを掲載しています。掲載のご希望がありましたら、是非事務局へお知らせください。

報告

幹事長　富山　修一

新潟高校の新校舎が出来て、はや九年が経ちました。

この時に、昔、皆様から記念に植樹していただいた48回卒業生の「ハナミズキ」と「月桂樹」、および66回卒業生の「オリーブ」の記念樹を校舎中庭に移植いたしましたが、残念ながら土との相性が悪く木の元気が無くなってしまいました。造園業者に聞きましたところ「土を入れ替えれば元気になる」との事でしたので長谷川会長と相談の上、「樹木土壌改良育成委託工事」として一一九、七〇〇円を支出いたしました。

来春には元気な新芽が出ると思います。ご来校の際にご覧下さい。

48 期の皆様方へ（お礼）

幹事長　富山修一

この度、48 期卒の皆様方より 115,000 円のご寄付を頂きました。

趣旨は、毎年開いている同期会の出席者が少なくなりましたので正式に呼び掛ける会は平成 15 年で最後とし、会の残余金を全て青山同窓会に寄付をして下さったものです。

最後の同期会は平成 15 年 10 月 19 日に行形亭さんで 31 名の参加でおやりになったとの事（詳しくは会報 78 号に掲載）。

ちなみに寄付を頂きました昨年は 84 歳の年男でした。同窓会会計の基本財産に繰り入れ大切に使わせて頂きます。

大変ありがとうございました。

新春特別対談

～火坂雅志さん（83回）をお迎えして～

二〇〇九年ＮＨＫ大河ドラマの原作「天地人」の著者、火坂雅志さんをお迎えして、同窓会長　長谷川義明さんがお話をお伺いしました。

○長谷川会長（以下　長谷川）
　二〇〇九年の大河ドラマに火坂先生の原作「天地人」が決定されたという素晴らしいニュースに同窓会の皆さんもたいへん喜んでおります。本当によかったですね。おめでとうございます。

○火坂先生（以下　火坂）
　主人公は直江兼続（なおえかねつぐ）という、新潟県出身の戦国武将ですが、上杉謙信の跡を継いだ景勝を助けて知恵を振り絞り戦国を生きてきた主人公です。戦国武将というものは、下克上を起こして主君を追い出したりするものですけど、彼は主従ともども手を携えて一生懸命やっていくと言う点が珍しいですね。この直江兼続を大河ドラマの主人公にしてほしいという運動は一〇年くらい前から新潟県内の六日町、与板、上越市の方であったのですが、なかなか日の目を見なかったんです。けれど、私の書いた「天地人」が、直江の一生を描きった作品でしたので、ＮＨＫからもこれでいこうということになりました。

○長谷川
　先生が直江兼続を描く以前に、別にそういう運動があったんですね。

○火坂
　はい、皆さん有志で運動をやってきたんですけど、ご高齢で、とくに中越地震後は、意気阻喪してきて、自分達の目の黒いうちは駄目なのではないかと落ち込んでいたんですね。だから、現実に大河ドラマになって、本当に良かったなと思いました。

○長谷川
　それにしても、本を拝読すると、よく調べられていて、全体のストーリーとしても本当に充実した素晴らしい内容になっていると感心しました。そして、所々に私どもの知らなかったような事、たとえば、禰津（ねつ）のノノウの話などが出てきますでしょ。本当にこのような事があったのかな？と思ったりしたのですが。

○火坂
　禰津（ねつ）のノノウは、実在していました。もちろん小説なので、フィクションも多いのですけど、基本的に事実関係は損なわないように、むしろ、生かしながら書いています。

○長谷川
　上杉家が会津に移封になる、その背景の石田三成とのやりとりなど、実に説得力のある書き方で、歴史のいろんな資料や、古文書に目を通されたんでしょうね。

○火坂
　歴史小説を書き出そうとした時に、必ず最後に上杉謙信、直江兼続、真田幸村、この三人は大きなドラマに書こうと思っていて、特に直江兼続というのは新潟県人ですので、思いが深かったんです。ですから、この「天地人」を書くときは何だかすごく重苦しくなりました。自分も新潟県人ですので、そのいい所も悪い所も知っているし、自分自身の内面を見つめなければならない作業でした。だから、非常に後で読み返すのが辛くて、私の中で特別な小説でした。だからこそ、大河ドラマになったのかも知れないですね。

○長谷川
　そうでしたか。非常に中身が濃い感じがしますものね。取材の為に足跡を辿っていろいろな所に行かれたりもしたんでしょう。かなり不便な事もあったんでしょうね。

○火坂
　ふだん机で仕事をしているので、あまり歩く機会もなく、山城登りはたいへんです。でも、新潟県人である私が書くので、雪の描写、雪国独特の食べ物、生活習慣などに色々工夫しました。

○長谷川
　新潟高校からは近年文人が出ていなくて寂しく思っていたのですが、とうとう、このように金的を射抜いて頂いたなと、本当に嬉しく思っております。

《高校時代の思い出》

○長谷川
　先回の会報に六〇回卒業の上杉先生が火坂先生の学生時代の話を書いてくださっています。新潟高校の思い出をお話しくださいませんか。

○火坂
　新潟高校って、大学のような高校だったなと後になって思います。当時出来たばかりの学食に行ったりして、自由な雰囲気で、高校で大学生活を送っていたような気がします。そして、高校には名物先生がたくさんおられたんですが、上杉先生も名物先生の一人でしたね。

○長谷川
　上杉先生は英語の先生ですよね。

○火坂
　三年生の時の担任が上杉先生でした。先生も私も宮沢賢治が好きでしたので、宮沢賢治論を戦わせたりして、楽しかったです。

○長谷川
　あちこちに投稿をされたりもしていたそうですね。

○火坂
　最初は詩を書いていたんです。当時、新潟日報に詩の投稿コーナーがありまして、高校生の終わりから大学生の頃によく投稿していました。そして、坂口安吾の小説を愛読していました。歴史小説というものは読んだことがなかったです。でも、高校の授業の中で歴史が好きでした。世界史の教科書の事実関係の完全な誤りを発見して、先生の間でたいへんな話題になったことがありましたね。

○長谷川
　それは、歴史に対する興味があるからですよね。また、そういう発見をしたことが自信につながったかもしれないですね。あと、青陵祭の思い出などはありますか。

○火坂
　先ほど、大学みたいな高校だと話しましたが、青陵祭もそうですね。あれだけ時間をかけてする所って、ちょっと無いと思いますね。伝統があって。受験も控えているのに時間がもったいないという意見があった時に、当時の校長先生が「人生にもまた無駄な時間も必要なんです」とおっしゃった。高校時代にはよくわからなかったんです。けれど歳を重ねるうちに、無駄と思うものが後になっていいものに繋がっていく、先生の

おっしゃるとおりだと言う気がします。

《歴史小説家になるきっかけ》

○長谷川

そして、大学は早稲田大学に入られましたが、どちらの学部でしたか？

○火坂

商学部です。突然自由な世界になったものだから、ほとんど授業に出ないでマージャンばかりしていました。それで、頭に靄がかかったようになって、自分は何をしているんだろう、やりたいことを見つけたい、と思いました。その時に学内に「君も竜馬や信長と語り合いませんか」というポスターを見つけて行ったら歴史小説の会でした。そこの読書会で初めて司馬遼太郎さんの「燃えよ剣」という作品を読んだら面白くて、こういう歴史小説を書いていけば、人間的に深みが出るし、勉強もしていかなければいけない。二〇年三〇年かけて頑張るというのが自分に合っているような気がして、歴史小説を書いていくと宣言したのが大学二年生の時でした。それからは、毎日図書館に閉じこもって勉強しましたね。

○長谷川

その時に歴史小説をたくさん読んだんですね。

○火坂

そうですね。大学時代に有名なものはほとんど読みました。歴史小説は事実関係だけ書いても駄目なんです。歴史の勉強を進めながら、文学的な小説作りのコツを身に着けるのに一〇年はかかりましたね。そして、「花月秘拳行」でデビューしてプロになって、職業として食っていけるかという中で結果を出していくという実践が一番勉強になりました。

○長谷川

自分がその気になってやりだす、というのは基本なんですね。後輩に対して素晴らしいメッセージを頂けました。

○火坂

全部整ってからしようとしても、逆になかなか出来ない。黒田如水が片足に草履を履いて片足に下駄を履いている、それでも走りださなきゃならない時があるのだと言っています。天地人とは、天の時、地の利、人の和を整えよ、という事ですが、でも、時には完全に整わない段階でも走り出さなければいけない時もあるのではないかと思います。

○長谷川

余談ですが、火坂先生はいつも和服スタイルですが、これはいつ頃からなんですか。

○火坂

十作目が出たときくらいのことですかね。このまま迷わずに行こうという覚悟が定まっていたので、歴史小説家だな、とわかるように着物スタイルにしました。また、古いものが好きなので、昔の文士のように着物姿をして、伝統文化を大切にしようかなという思いもあります。

《今後の予定》

○長谷川

「天地人」は新聞小説という事でありましたから、毎日毎日ドラマがあるって言うか、そういう点もまた、工夫しなければいけなかったんですよね。

○火坂

新聞小説はいろいろ条件があるんですよ。私にとっては、書き足りていない所もあったので、本にする時にかなり書き足しました。そして、まだ私は完全燃焼していないので、来秋に普及版が出るので、かなり書き足そうと思っています。

○長谷川

長い期間書き続けていくのも、大変な努力なんでしょうね。

○火坂

そうですね。これを書きながら、小説の中に直江のライバルとして出てくる伊達政宗に興味を持ちまして、その後連載して「臥竜の天」（祥伝社）という本が出ました。そして、「天地人」の中に出てくる上杉かぶき衆を短編で連作しています。第一回が、前田慶次郎です。

○長谷川

精力的に作品をお書きになっていますが、何か気晴らしの趣味とかはありますか。

○火坂

趣味は全く無くなってしまいました。歴史小説が趣味です。短編小説は削っていく文学なので、精神がぴりぴりした状態でないと書けないです。だから、熱が出て倒れることがあります。そういう時は海岸の近くなので、海を眺めたりしていました。気候がいいので日光浴とか海風に当たっていると、元気になりますね。あと、酒です。わかりました、私の趣味は酒ですね。特に新潟の酒が好きで毎日飲んでいます。日本酒が一番落ち着くんですよ。リラックスしますし。

○長谷川

本日は本当にありがとうございました。講演会等で東奔西走でしょうけど健康に気をつけて頑張って下さい。これからも、新潟を舞台にした作品が出てくる事をありがたく思います。

（平成十九年十一月二日、ホテル新潟にて）

この対談の日は、篠田新潟市長との対談で御来県でした。火坂先生が新潟日報にて初めての新聞小説を連載した当時の学芸部長が篠田新潟市長だったそうです。

お忙しいスケジュールの合間の貴重な時間を割いて、たくさんのお話をしてくださった火坂先生、どうもありがとうございました。

なお「天地人」は平成十九年十二月一日に本に関する歴史・時代小説を対象にした「中山義秀文学賞」に選ばれました。あらためてお祝い申しあげます。

会報編集委員　石井　智裕（679回）
　　坂井　奈津子（9回）

プロフィール

火坂 雅志（ひさか まさし、一九五六年 ―）新潟市生れ。新潟県立新潟高等学校、早稲田大学商学部卒。

早稲田大学在学中よりサークル早稲田大学歴史文学ロマンの会に所属し、歴史文学に親しんだ。サークルの同窓には阿南市長の岩浅嘉仁がいる。また歴史作家の菊池道人もサークルの後輩である。大学卒業後は、編集者として出版社に勤務し、一九八八年に『花月秘拳行』でデビュー。吉川英治文学新人賞候補の『全宗』で注目される。伝奇性の強い作品が多いが、近年は本格的な大型時代小説を発表している。主な作品に『覇商の門』『黒衣の宰相』『天地人』など。

森達也、斎藤美奈子は高校の同級生。

主な作品（近著）

蒼き海狼（小学館）
黒衣の宰相（幻冬舎）
黄金の華（日本放送出版協会）
虎の城（祥伝社）
沢彦（小学館）
天地人（日本放送出版協会）
など

同期会報告

傘寿を迎えて

澤田　義郎（52回）

第52回生は、昨年平均寿命の七九歳をクリアし傘寿を迎えた。後は余生ということになる。

我々の生きてきた時代は将に波乱万丈　昭和一九年から志願して陸軍に、海軍に　佐藤隆君（元農林水産大臣）も海軍へ、残った生徒は勤労動員で名古屋へ長岡へ、

昨年亡くなった次の両君の、軍歴を経た輝かしき人生を紹介したいものと筆を執る。

筑波龍子君
昭和一九年　特別幹部候補生として陸軍航空通信学校へ入学
昭和二一年　復員
農林省新潟資材調整事務所等を経て
昭和三四年　新潟県秘書課勤務
鈴木副知事の秘書として活躍
昭和三七年　昭和四〇年の知事選に吉浦浄真を支援のため県を退職
昭和三八年　事業を起こして活躍　長年、青山同窓会幹事として同窓会の発展に尽力
平成一九年六月　他界

佐藤昭三君
昭和一九年　海軍兵学校
昭和二一年　旧制新潟高等学校
昭和二三年　東京大学
昭和二七年　日産自動車に入社
日産ブルーバードの設計に従事　世界をまたに駆けて活躍
平成一九年七月　他界

卒業53周年同期会の記

池田　昌之（62回）

九月三十日（平成十九年）、昭和二十九年卒業生七十五名が信濃川岸のホテルオークラ新潟に集まった。三年前の卒業後五十周年以来の再会である。当日はめっきり気温が下がり、東京から参加した筆者に、鉛色の曇り空がはからずも越後の冬を思い出させてくれて懐かしかった。

冒頭に司会の星野陸夫君の発声で五十四名の物故者を偲ぶ黙祷が行われた。その鬼籍の名簿に眼を走らせる。思わず漏れる発見の嘆声と共に懐かしい顔が脳裏に浮かび、多くの魂魄が空の彼方から引き寄せられこの集いを見守っているかも知れないと、ふと思う。

そして皆川重君の指揮で恒例の「玲瓏の天仰ぐとき」と「百里流れて信濃川」の斉唱だ。今更ながらその歌詞の素晴らしさに我らが青春の記憶を重ね合わせて味わいつつ歌った。

それから新役員の紹介と挨拶、新幹事長は原正雄君、若き日のボートの五輪日本代表である。それから副幹事長は星野陸夫・平原康男の両君。いづれも卒業以来の永年、何かにつけて労を惜しまず同期生の取り纏めを勤めてきている、いわば万年の常設幹事役である。

思うに蓋し我が「青山」は人材の宝庫であった。毎回多士済々の同窓生が脚光を浴びて登場するが、今回の乾杯の発声は山越寿夫君である。原子力の専門家で、昨年の春の叙勲で瑞宝小綬章を受勲されたのは、まことに同慶の至りであった。

宴会では卒業時のクラス別に、AからGの八つのテーブルに座る。しかし前菜が終わるか終わらないかのうちに、てんでに自分の席を離れ他のテーブルとの交歓が始まった。

学生時代はただ遠くから眺めるだけであったマドンナたち六女史は、人気の的である。そこは古希を過ぎた歳の功で、臆せず声を掛けられる。そして気持ちだけは大いに若返り、華やいだ雰囲気の中で八時過ぎとなった。青柳正男君の発声で、「丈夫」の斉唱に続いて、マドンナ代表の杉内（金子）愛さんの挨拶で閉会となる。次回の五十五周年が待たれる。

この会は番外編があだ疎かに出来ない。当日夜は、古町のクラブでカラオケ大会となり三十六名が参加して大いに盛り上がった。さらに翌日は、中峰GCで三十名の参加のもとにゴルフコンペが行われた。当然、これらに参加する、しないは自由だ。ただえてして、口さがない悪友たちの欠席裁判で旧悪を露見されたりするので、欠席には覚悟がいる。（了）

卒業五十年の集い

大橋　修一（65回）

私たちは、昭和三十二年三月に新潟高等学校を巣立って、昨年で五十年を迎えました。卒業生三百三十二人、鬼籍に入った方が四十九人、住所不明者二十七人です。

65期はこれまで五年ごとに同期会を開いていました。今年は五十年の節目、多くの人に参加してもらいたい、という思いで企画を練りました。開催の日時については、まだ現役で仕事をしている人も多いので日曜日とし、なるべく家庭の行事と重ならないようにと三連休を外して季候の良い秋、九月三十日に決めました。泊まりがけにして話がゆっくり出来るよう月岡温泉白玉の湯『華鳳』で開催することにしました。月曜日からの仕事に間に合うよう新幹線最終の東京日帰りコースも用意しました。多くの人に同期会参加を予定してもらえるようにと五月に第一回の案内を出して意向調査を行ったところ一〇四人から参加したいという返事が届きました。幹事としては嬉しい数字です。

八月末に最終の案内を出しました。五月には参加の表明をしていた人も、結婚式、法事、出張、発表会、町内会や所属団体の行事、そして体調不良になった等々で欠席する人が増え最終出席者は七十六人になりました。

当日は好天に恵まれ、遠くは

神戸市、長岡京市からの参加もありました。五時に開宴。最初に鬼籍に入った方々に黙祷を捧げてから懐かしい校歌、応援歌を歌いました。「卒業以来久しぶりだったけれど忘れていなかった。当時のことを思い出しながら歌った」と皆さん昔を懐かしんでいました。卒業以来初めて顔を合わせるという人も居て仕事や家族のこと、気力体力のことなどと際限のない話にすっかり時の経つのを忘れてしまいました。

明けて翌日は有志二十二人が参加して、今年十月に日本女子オープンゴルフ選手権競技が開かれる紫雲ゴルフ倶楽部でゴルフ大会が行われ、東京から参加の中谷一泰氏が優勝しました。準優勝は地元の佐藤勝弘氏、三位は愛知県小牧市から参加の須田綾英さんでした。

少し若返ったような二日間があっという間に過ぎ、五年後の卒業五十五年大会に元気で出られるようにと再会を誓って別れました。

第四回青山六八会作品展

鈴木　喜也（68回）

平成十九年は九月二十日～二十四日の五日間、新潟県民会館一階展示場で開催。十九日午後から出品者と他の有志十数名での飾りつけ、回数をかさねるたびにこの作業も上手になってきて、過去三回よりも陳列の出来栄えも上々、短時間で準備完了となりしました。

五日間の総入場者数は事前のPRが充実していた為か、四九〇名と大入りでした。

作品は、出品者を一九六〇年に県立新潟高校を卒業した68回同期生とその家族に限定し、ジャンルは限定なし、創作物なら何でもOKと当初に決めたことを守り続けています。

今年の出品作品の概要

書は「経」「詩」「歌」「句」「篆刻」「拓本」等に、常連の恩師松沢昭然先生　故渡辺秀英先生　長谷川義明同窓会長（以上特別出品）霜鳥恵子　上村敦子　丸山和子　勝見功などに加えて、新たに加藤達雄　斉藤正果　滝沢猛など十名十四点。絵は「油絵」「水彩」「水墨」「版画」「パソコン画」「他」等に、池主憲夫　伊藤洋子　上村昌司　加藤とも　片桐靖孝　阿部紀一　池上靖子　田中宣男　澁谷暁子　斎藤則子（正果夫人）　石山巖　岩原修爾　西原徹　鈴木喜也等十四名二十四点。写真は田中光弥　加藤健一　北村泰作　酒井囡子（竹石兄弟の妹）　若林茂敬等五名七点。陶芸は佐藤公子　斎藤健弥の二名三セット。木目込み（人形など）に中野和香子　上村嶺子の二人二セット。能面二面、音楽CD制作一式、帆船模型一隻　菊一鉢等に若松昌弘　青木彰　鈴木喜也等が出品。総計三十五人五十五点の作品が並んだ。

いずれも、それぞれ 個性と意地の込められた逸品と言えるが、観衆から評判が良かったのは、絵では 進境著しいと囁かれた 石山巖　西原徹の両君、陶芸では「この品物欲しいなー」との声の聞こえてきた佐藤公子さんであろうか。

展示会のあと反省会と称する酒宴でも三十名の出席があり大いに盛り上がった。「マンネリ傾向のあるなか、四回まで良く続いたなぁ～」と批判的な声も聞こえるが、来年は？の問いに、「早目から作品の製作に取り掛からなきゃ・・」など大勢は、開催の方向だ。

作品展の詳細は「青山68会」ホームページ。(http://www.kitamurass.co.jp/aoyama68)に掲載しています、ご一覧下さい。

青山六八会　尾瀬を歩く

加藤　達雄（68回）

梅雨あけまじかの昨年七月十日、十一日、ニッコウキスゲの咲く尾瀬ヶ原を歩きました。

一昨年は残雪の六月、沼山峠から入って大江湿原、尾瀬沼を散策し、ミズバショウとまぶしいほどの新緑を楽しんできました。この時は参加六名で日帰り。「今度はもっとのんびり歩きたいな」との希望が多かったので少しぜいたくな行程で計画しました。混雑を避けて平日の一泊二日、マイクロバスを使っての旅です。参加は、前年の倍の十二名でした。

鳩待峠から「山ノ鼻」を経て「見晴し」まで歩くコースです。缶ビールなどで重くなったザックを背負い、リーダーに従い整然と出発しました。

隊列を組んだ初老の男だけのパーティは異様にうつるのかも知れません。「男性だけ？・・・めずらしいね」行き交う人たちのささやきが聞こえてきます。

「モウセンゴケ見つけた！」などとはしゃいでいる二十名くらいの園児の団体に出会いました。いい光景です。見ているだけで元気になります。

「山ノ鼻」での昼食の頃から空は霧雨にかわりましたが、雨もまた良し。キスゲ、カキツバタなどの鮮やかな色に潤いが加わり、池塘の小さな波紋と調和して、一ぷくの絵を見ているようでした。

雨に煙る燧岳や至仏山を眺めながらの木道歩きはまさに尾瀬ヶ原の中心にいる気分です。たっぷり歩いて東電小屋には予定通り四時に到着しました。

小屋の従業員（東京電力の社員）から尾瀬の自然についての解説を聞いたあと、ビール、焼酎、ワインなどで談笑し午後九

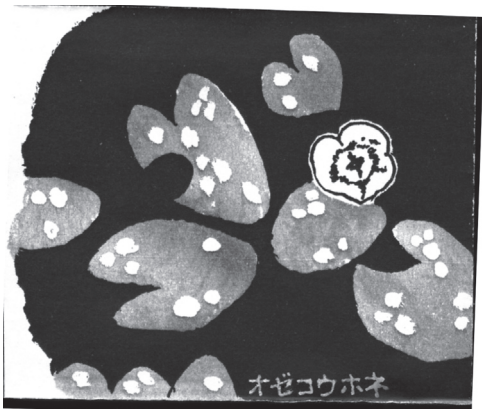


イラスト　岩原　修爾

時過ぎに就寝。

夜半、屋根を激しく叩く雨音に、きょうは完全装備か、と覚悟をしましたが夜明けには雨もあがり鳥のさえずりさえも聴こえてきました。皆、早起きです。予定より一時間ほど早く小屋を発ちました。（これが正解）

トキソウ、ヤナギラン、ヒツジグサ、オゼコウホネなど図鑑を調べながら歩きます。

まわりの山や木の緑と白樺のコントラストが美しい。広がる青空に太陽がときおりのぞき至仏山の稜線があらわれると歓声があがります。大自然をおおいに満喫できました。

鳩待峠に近づいたところ雨となり、ゴールでザックをおろしたとたん、土砂降りにかわりました。まさに危機一髪、早く出発したのが幸いしました。

帰途「吹割りの滝」を見物し老神温泉で汗を流し、ことしの尾瀬は終わりました。

卒業四十周年記念の会

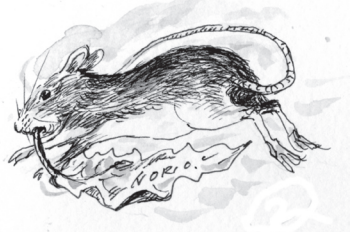
富山　修一（75回）

政令指定都市記念市民ミュージカル「明和義人」がりゅーとぴあで演じられていた九月一日、我々青山七五会は卒業四十年の記念イベントを執り行いました。

同期の物故者に黙祷をささげた後『昭和三十九年の新潟地震・新潟国体・東京オリンピックという大きな事件のあった年に私達は入学しました。振り返ってみれば定年まであと二年。頑張った事、楽しかった事、切なかった事、みんながそれぞれの人生を歩んで来ました。これも「師の恩」つまり新潟高校で学んだ時があったればこそ、と思い立ち、まだ仕事が現役の時に恩師に恩返しをしなければ…と考え、めったに入れない鍋茶屋さんで「謝恩会」を開催させて頂きました』と堀一幹事長が開会の辞を申し述べ、続いて星智信先生（日本史）渡辺卓爾先生（数学）滝澤強一先生（国語）の三先生よりお言葉を頂戴いたしました。

乾杯は「明和義人」ではありませんが同期の中から唯一「他薦」により選ばれた篠田昭新潟市長から音頭を取ってもらいました。少々高い企画で心配していましたが女性から大変好評を得、写真の通り多くの同期の方々から来てもらえました。

青山七五会では二十年以上にわたって毎年二回、淡々と同期会を開いています。六十歳を境に勤務先や住所が大きく変るものと覚悟をしています。そしてこれからの人生こそ同窓・同期がもっともっと大切になる時代になると確信しております。



青山第85期同窓会の開催

幹事　梶原　裕（85回）

高校卒業以来三十年が過ぎ、我々第85期（昭和五十二年卒業）同窓生も今年四十八歳のまぎれもない中年世代となりました。久しぶりに懐かしい出会いを求め、二〇〇七年八月四日午後六時より新潟グランドホテルにおいて第85期青山同窓会を開催しました。

準備は半年程前から十二名ほどの幹事が集まり開始しましたが、なにせ久しぶりの同窓会ですので名簿集めやハガキでの案内など苦労し、当初はどれだけ集まることやらと懸念しておりました。ですが幹事の皆様の頑張りで当日は一二〇名ほどの参加をいただき、大盛況となりました。（さすが青山健児！）今回の目玉は我々の担任をしていただいた高名な（？）先生方においでいただいたことです。金子先生、石崎先生、小泉（正）先生、関根先生、野坂先生、目黒先生、澤田先生、本田先生、渡邉（精）先生、なんと九名もの先生方にご出席いただき本当に感謝しております。

三十年前の高校時代にやんちゃをして、大変ご迷惑をかけたお詫びの言葉と、そして何とか大人になった今、遅ればせながら感謝の言葉を申し上げさせていただきました。そしてささやかながら同窓生全員で記念と感謝の品を贈呈させていただきました。

その後、アトラクションあり、応援団長リードの丈夫（ますらお）あり、で一次会はあっという間に終了。お隣のレストランにてほとんどの方が二次会にも参加、三十年振りの再会もあり、まさに「一期一会」ならぬ「越後一夜」の楽しい夜になりました。

やはり高校卒業から三十年経つとみんな落ち着いてきて、いい感じの大人になっていました。同窓会をやるにはちょうどいい頃なのかなと実感した次第です。

ご出席いただいた恩師の先生方、同窓生の皆様本当にありがとうございました。ご準備いただいた代表幹事の高見清志君はじめ幹事の皆様大変お疲れさまでした。

卒業二十周年の集い

浅妻　信（95回）

昭和六十二年三月に卒業した、私たち95期生初となる大規模な同期会が、十一月二十三日の夜、ホテル日航新潟で開催され、盛会のうちに、無事幕を閉じました。なにぶん、幹事としても初めての経験で、計画したはいいものの、一体何人集まるんだろうと、時が経過するにつれ大いに不安になることもあり

ましたが、当日は、北は北海道から南は宮崎まで、実に百名を超える同期生が全国から駆けつけ、旧交を温めました。

開催のきっかけは、昨夏の青山総会でした。気がつけば我々も、卒業してもう二十年経っていました。青山の卒業生は、多くの者が進学等で県外に出ます。母校愛はあるものの、日々の忙しさにかまけて、なかなか同期会のようなものを開催できない学年も多いのではないでしょうか。私たち95期がまさにそれでしたが、一念発起し、やるからには盛大にやろうと、多くの同期生の力を借りながら、無事開催にこぎ着けた次第です。

会は、実行委員長である山際克也君の挨拶でスタートしましたが、実行委員会として準備したのはそれぐらいで、後はホテルが用意してくれた料理に手をつける間もなく、久し振りに会えた友人との会話を求めて互いに交流し、にぎやかな、いや、極めてハイテンションな懇談の場となりました。二十年ぶりに顔を合わせる者が多かったですが、多くは学生の頃の面影をそのままにしており、ほっとしたのか残念だったのか、その辺は各自の判断に任せます（笑）。

不惑直前である私たちは、仕事の面でも子育ての面でも、色々思い悩むことが多い年齢だと思います。久しぶりに同期で顔をあわせ、みんなそれぞれの道で頑張っていることを頼もしく思うとともに、大いなるエネルギーと明日への活力をもらいました。ほぼそのままの人数で移動した二次会への脅威の出席率が会の成功を物語っていると思いますが、次回は東京で、の話も早速出ており、これを機に、95期一団となって盛り上がっていきたいと思います。

第三回青々会総会のご報告

田中　健一（105回）

第三回青々会総会「芸を観ながらディナーでも（青々会員芸の夕べ）」が、平成十九年十月十三日十九時より開催されました！村山朋彦さん（94回）の司会の下、始まりました青々会総会。今回は「芸を観ながらディナーでも」の副題のとおり、プロ・アマの新潟高校卒業生による、芸術を披露していただきました。

まずは、第一部　プロの芸に酔いしれる「インド古典舞踊」インド古典舞踏家　岡村知子さん（第97回）。その素晴らしさを体験できたのは、会場に行った皆さんの特権ですね。

続いて、第二部は「ボサノバ」THE　サンチョメ（佐々木美佳子さん（第103回）他三人バンド）の演奏でアマの芸に酔いつぶれる。総会で初対面同士が多かったのですが、美声と質の高い音楽で皆さん緊張も取れ、いつもの青々会になってまいりました。

続きまして「飛びだせ健康（漫談）」NAMARA健康部「ケーシーズ」（佐藤万成（第91回）、NAMARA代表江口歩

通信制コーナー

今の私と川柳

猪倉　フミ（26回）

新潟高校通信制閉課程記念式典からもう二年が過ぎました。あの感動は万感胸に迫るものでした。

私は退職後四年となります。この間新潟に中越地震、中越沖地震と二つの地震に遭い被災された皆様には大変な御苦労、御心労があったことと思います。おそまきながら御見舞申し上げます。

私は退職当時、首のヘルニアの手術後のリハビリで、プールやジムで体力作りを始め、六十の手習いで民謡の踊りとダンスを手がけ、週一回は兄（難病ALSで人工呼吸器装着）の介護に通っていました。そんな折退職した職場から外来の案内係りの仕事（午前二時間、週三回）の依頼。その後、社員組織（出資者の組織）の役員依頼を受け、そんな事でプール通いは断念。民謡等は芸能祭参加や慰問活動にと、大変ながらも楽しくやっています。しかし加齢と共にやってくる脳の退化、予防には創作活動が最適と思い川柳講座の受講となりました。大野風柳先生始め世話役さん達の熱心さ、優しさ、そして川柳の楽しさから新柳会に入会。月二回ある例会の一回は講師から没句の批評があり、順次佳作、秀句、特選句と進みます。受講生のときは佳作をもらえたのに入会後は没句続きです。先輩たちの句は私などには難しく閉口しています。大先輩と同じ課題なんか出来っこないと自身を励ましたり、やけになったりとストレスを増やしているそんな自分を、脳のトレーニングと考えるその事が大事なのだと納得させるのです。

一句

「川柳の合格の道けものみち」

（受講生時の佳作）

昨年春、同期に入会した五人（男二女三）で「手頃会」を結成。お互いに励まし合い手を取り合って頑張っています。同期の中には秀句、特選句と入選した立派な成績の人もいます。

それにしても例会の他に、吟行会や川柳大会など多彩な行事もあり川柳の道は非常に奥が深いと言う事を改めて知らされた次第です。

昨年は、川柳の歴史二百五十年と言う事で「川柳二百五十年展」が東京をはじめ主要都市で開催されてました。

軽い動機で入った新柳会、入ってみてはじめて知った奥の深さ、歴史の長い重さのある川柳界、自分自身のやれる範囲で仲間と一緒に落ちこぼれない様についてゆきたいと思っているこの頃です。

さん)。NAMARA代表江口さんは『俺はアマチュア部門かよ!!!』と開会時に叫ばれてましたが、今回はそういうことでご勘弁を願う。江口さんがお持ちの新聞には『デキる男が好き!』との見出しが躍っていたが、どのような話だったかは、今回来れなかった方はそこから想像してくださいね。

そしてトリを飾るのは、「フラメンコ バレエ」カルメン九〇九一(田辺裕美さん(第90回)、風間まゆみさん(第91回))こちらも華麗なるフラメンコバレエを披露していただき若さがはじける青々らしくなりました。

そして最後には、こういう時でしか歌えない『ますらお』!!!普段全く歌わない歌なのでうろ覚えなところもありますが、ちょっと分からなくても、その辺は皆ノリで乗り切りました。

約二時間、盛り沢山の内容だったので時間が早く過ぎてしまい、まだまだ盛り上がりたい多くの方々が二次会〜三次会へと向かったのでした。

第二四回青山ゴルフ会【「71回卒」優勝奮戦記】

中野　久(71回)

年二回のお楽しみ「青山ゴルフ会」。この度も49回卒の大先輩から、96回卒の頼もしい後輩達まで総勢五十七名の参加により各回卒の威信をかけたプレーが展開された。我が71回卒は気合い充分「狙うは団体戦優勝・打倒69回卒・連覇を阻止せよ!」と小雨の中を突き進む。にしても…高校時代から変わらないものですね、性格ってやつは。黙々と真面目に取り組む小黒俊彦君(無口ながらも気合いはメンバー一)。明るく活発なムードメーカー熊倉哲君(ゴルフの腕も軽妙な口もやっぱり君には敵わない)。冷静沈着何事にも動じない山本俊介君(水平スコアもやはりそれ故と納得)。ゴルフにそれぞれの「らしさ」が見られ、学生時代を想い出すのもこの大会の嬉しさだ。かくいう私は、前半好調で「午後は雪か?」と囁したてられるのがいつもの役割。せっかく?ダブルボギーを叩くも隠しホールに懸からぬところが相変わらずのオッチョコチョイぶりである。誉めたりケナシたりワイワイと学生時代に戻って楽しいゴルフとなった。朝の小雨はいつしか晴れ間が見られる程に回復するも、我らがプレーを終えると同時に土砂降り…天も71回卒に味方か!気心しれた仲間がそれぞれの持ち味を発揮して勝ち得た団体戦優勝だ、万歲!

【第二十四回青山ゴルフ会成績】

●個人戦優勝
69回卒　大谷勝美氏
グロス82・ネット70

●団体戦優勝
71回卒
ネット合計218.6

◇　◇　◇

我ら71回卒=『さんぱち会』にとって、二十五年続いた春秋年二回定例ゴルフ大会が何よりの修練場。

今年も六月十四日(土)には「さんぱち会　卒業四十五周年同期会総会・ゴルフ大会」と銘打って大々的に開催予定。

◇　◇　◇

我ら71回卒は今回三度目の団体戦優勝。しかし連覇は未だ無し……ならば次回の青山ゴルフ会も、71回卒が団体戦優勝・そして連覇を狙います。

乞うご期待!

OB会報告

水泳部関川村合宿を激励

青山水友会事務局　横瀬　功(66回)

「関川村に関川はないよ。あの流れは、荒川だ」と、枡山純さん(62回)が、川を遠望するのは、旅館裏にある小高い丘の上であった。辺りは、蝉時雨に包まれていた。水泳部合宿生徒を激励するため、平成十九年八月五日水友会員が、ここに集まった。平田大六村長(60回)が、歓迎の挨拶をする。大黒善弥会長(50回)が、背を伸ばして再会を喜ぶ姿は、カクシャクとしている。前日から旅館に泊まり込んだ実年トリオ・中戸雅博さん(83回)、松木保さん(84回)、長谷川富明さん(84回)が、カジカ獲りに張り切っていたが、前夜の大雨で川が濁り、無念の涙を飲む。しかし、この三人が、バーベキューの調理を担当し、火起こしから万事に汗を流してくれた。江口良助幹事長(61回)は、本職の大きなエプロン姿で、頼もしい貫禄を示す。目の前の若い選手に、往時を回想し、その眼差しに優しさがこもるのは、松本明芳さん(55回)である。

中戸義文先生に引率された十名の選手、それに三年生と新卒合わせて五人が、特別参加。水友会の九人とで、合計二十五人が、素麺流し、米沢牛のバーベキュー、焼きそばを笑顔で囲んだ。それに、独特な製法と無添加の美味しさで、今評判のハムとソーセージ専門店・ラインの高橋好陽さん(77回)が、自慢のソーセージをご寄贈くださった。更に、二十八名の会員が、寄付金でバックアップしてくださったのは、有難い応援であった。お陰で、和気あいあい、美味を共有しつつ老若が、親しく語り合った。

こうして、水泳部卒業生で作る「青山水友会」の伝統が、また新しいページを作りつつある。「青山健児だ、良く学び、良く泳げ」のメッセージを斎藤俊八郎さん(49回)が、送ってくださった。「今年は、佐賀で行われるインターハイに、初めて行ってきます」と、九年間部の顧問を引き受けておられる中戸義文先生が、ニッコリ。

恒例の「丈夫」と「水泳部歌」の斉唱と、青山のエールの交換で会を終わった。心なしか蝉時雨が、一段と声を高めたようである。

高齢化の進む水友会幹部三人であるが、今年の行事を成功裡に終えることが出来た。多くの会員の有難いサポートのお陰である。

青山体友会の集い

中川　弘（59回）

縁とは不思議なものである。同じ新潟中学・高校体操部に席があったということで、何十年たっても、親・兄弟・親戚の様に親しみをおぼえる。昨年も十月四日・二十一回青山体友会は開かれた。初参加の青山茂郎氏（55回）のピラミッドに話がいく。ピラミッドとは、両手をついて体をコの字形にして、一段目五人、二段目四人、三段目三人、四段目二人、頂上一人の組体操である。指揮者の笛に合わせ顔を左右にし、笛の合図で両手を前に出して、倒れる。一番下の人は上からの重みで、ギャーと言う運動会の花形である。青山兄弟は体が小さく軽いというので、いつも頂上であった。当時の写真は体操部の歴史として今でも保存されている。「そうそう」「みんなの息が合わないと大変なんだよ」と経験者でなければの発言である。今は体操部はないが鉄棒もないのだろうか、寂しい気がする。宴たけなわである。前回にひきつづき渋谷興司氏（53回）の手品にしばし視線がひきこまれる。安全ピンをハンケチに差し、抜く前回の手品を皆復習して、出来た出来ないとはしゃぐ姿はまさに幼な子のよう、たのしい一時である。今回はゴムが瞬時に指の間を移動、みんな一生懸命に自分の指に集中する。こうですよ、こうするのですよと体操をやった頃の過程と同じである。新潟の体操は、新潟中学より始まり、各学校へとひろがっていった。歴史と重みははかりしれない。青山体友会は今年も、来年も、体のつづく限り開催の予定である。出席者は近藤圓（38回）土田卯八郎（51回）渋谷興司(53回)青山昭郎(55回)青山茂郎（55回）中川弘（58回）中野文郎（59回）川上忠男（59回）であった。次の再会を楽しみに散会する。

青山バレーボールクラブ第十五回総会（平成十九年十月二十七日）の報告

青木　忠信（83回）

恒例の隔年開催も回を重ね第十五回となりました。当会の創設者の橋本行雄様（60回）と小杉秀一様（61回）、さらには新潟県バレーボール協会の計良伸正様（63回）、その他、諸先輩方のご努力の甲斐あって、前回の総会から100回以降の若者たちも参加するようになりました。ずっと最年少者として出席してきた小生としても後輩の登場を頼もしく感じたところです。今回の総会では、高橋主治様（57回）や遠藤整治様（58回）から鈴木一義君（108回）と駒形悠君（109回）まで、県外からの参加者七名を含み三十名が集いました。

総会は、代表幹事の小林政弘様（62回）の挨拶で始まり、初参加者と久しぶりの参加者からのスピーチ、続いて60回代と80回代、さらに100回代と、二十年間隔のバレーボール部の思い出（自慢）話と続き、後は順不同で思いの丈を述べました。バレーボールはその昔、屋外競技であったとの話には若者たちは絶句しておりましたが、全員が世代を超えて和やかに交流することができたと思います。個人的には中学及び高校の三年上の先輩で当時は怖かった滝沢正規様（80回）と本当に久方ぶりにお会して飲み明かすことがき、有意義な時間を過ごすことができました。

このように懐かしい顔に会えるのは勿論ですが、このOB会で初めて懇親する方々との交流も生まれます。よって、次回の第十六回総会にはより幅広い年代から参加していただき卒業年度の空白が少なくなるよう、新任幹事として努力したいと考えています。また、当クラブは男子限定ではなく、青山バレーボールクラブ「OG」にも総会の開催案内を発送していますので参加をお待ちしています。なお、本稿の執筆は、今総会の開催に一番ご尽力された白井秀昭様（72回）がふさわしかったのですが、ご遠慮されたため小生が担当することになりました。以上、ご報告申し上げます。

現役・OB交流会（山岳部巻機山に集う）

小林　容一（72回）

平成十九年九月八日巻機山麓の山小屋で、恒例の現役・OB交流会が催された。

私は今回が初参加だったが、先輩、後輩諸氏の元気な顔を見ることができ懐かしくもあり又現役の諸君からは元気をもらうことができ、感激の一時だった。代々の顧問の先生方も多数参加され、最近は現役部員の獲得が難しいことをお聞きしたが、今回女生徒三名を含む七名が入部していたことは、顧問の先生方の並々ならぬ努力があったものと思う。

昨年の交流会の時に加藤先輩（追悼登山隊長・70回）からも報告があったそうだが、故小林光衛先輩のネパール（タンボジェ寺院約四〇〇〇m）での追悼登山（二〇〇六年十一月五日出発、十二月二日帰国）に参加した。

カトマンズからオンボロ飛行機でルクラへ行き、それから四日を要してタンボジェに着き無事法要を営むことができた。その後エベレスト街道をひたすら歩き続け世界の名峰エベレストが眼前に迫るカラパタール（五五〇〇m地点）で世界の屋根を眺め、言うに言われない感動を覚えた。

さらに東へと進路をとり、十一月二十三日には氷河の中の独立峰で、氷の壁をもつアイランドピーク（六一六〇m）への登山を試み、感激の登頂を果た

した。五五〇〇m付近からは、氷河地帯となりクレパスも体験し、最後の二〇〇mは垂直に近い氷の壁にへばり付いてやっとの思いでよじ登った。

登頂前は頂上からたっぷり写真を撮ろうと思っていたが、思考力が無かったのだろうすっかり忘れていた。当日は、物凄い強風で稜線に立つことさえ許されず、シェルパからも早々の下山を促されやむなく氷の壁を降下し下山せざるを得なかった。午前三時にアタックキャンプを出発し、戻ったのが午後四時、意識が朦朧としていたのだろう。氷の壁を登っている写真が無いのは残念でたまらない。

日本にはない高所で、本当に高いところは酸素が少ないのだということを実感したのは帰国後だった。帰国してしばらくは、少々走っても息が切れないのだから不思議だ。

故小林光衛先輩が中央高校で指導した山岳部OGとともに今回のネパール計画が企画されたが、全てが何かの縁で繋がっているような妙な気持ちになった。

追悼登山に参加した同期の水野君、二年後輩の塚野君（追悼登山の副隊長）、五年後輩の熊倉女史、そして加藤隊長とのネパールでの思い出が今も鮮明に残っている。

これからも、現役との交流会を通して様々な海外登山の計画が湧いてくると思うが、チャンスがあったらまた参加したいと強く願っている。

今年もまた巻機山麓の山小屋で楽しい思い出話ができたらと、今から期待に胸躍らせている。

『ラグビー部創部六十周年記念行事について』

小見　毅（92回）

去る二〇〇七年八月十二日（日）にラグビー部創部六十周年記念行事が盛大にとり行われました。私の聞き及ぶ範囲のなかで、高校の部活動の周年行事を十年ごとに行うスポーツは、ラグビー以外には余り聞いたことがありません。それもOBが中心となって企画運営しますので、簡単ではないのですが素晴らしいことだと思います。やはり伝統を重んじる紳士の国、英国で生まれた紳士のスポーツだと妙に感心したりします。

当日は快晴猛暑の中、午後から現役高校生とOBの親善試合、夕方からは場所をホテルオークラ新潟に移し、スポーツライター藤島大様の記念講演会、その後、記念パーティーと盛りだくさんの内容でした。

親善試合は新潟市陸上競技場を貸し切り、七十余名のOBが全国から集まりました。芝生の状態は最高で、まるで絨毯のようでした。もう何十年もラグビーから離れていたOBも〝ビフテキ〟（擦過傷）を心配することなく参加できるような環境でした。これだけの人数が集まってくれると運営側としてはとても助かりますし、盛り上がります。少しずつでも交代でプレーできるので、お久しぶりのOBもラグビーを堪能しておられました。

記念講演会はラグビー出身のスポーツライター藤島大様が新潟高校の現役ラガーメンに『知の熱』と題して熱いエールを送ってくれました。藤島様は新潟高校ラグビー部が二度目の花園出場を果たしたときのことを『ラグビー特別便』という著書に取り上げていただいております。そのご縁を頼りにお願いをし、手弁当で引き受けていただきました。現役高校生は新潟高校でラグビーができる幸せを感じてくれたのではないでしょうか。

記念パーティーはOB約百二十名、関係者ご来賓約二十名、計百四十余名で盛大に行なわれました。懐かしい顔ぶれが集まり、大先輩から卒業したてのOBまで幅広く懇親を深めました。初めて花園出場を決めた試合や二度目の花園出場試合のビデオなど、当事のメンバーの解説で会場の雰囲気は最高潮。ラグビー部の象徴である関根先生のお話、最後は恒例の〝丈夫〟で六十周年行事は幕を閉じました。

『ラグビー』というスポーツが結んだ縁でこれだけのOBが集まり、楽しく懇談しました。

平成十九年フェンシング部OB会報告

石原　基規（88回）

フェンシング部OB会を平成十九年十一月二十四日（土）に古町安兵衛で開催しました。58期から108期までの十五人のOBが集まり、楽しく懇談しました。

新潟県フェンシング協会会長でもあられる58期加藤高弘さんが乾杯挨拶を行いました。そこで、二〇〇九年開催の新潟国体での協力をお願いされました。

87期遠藤先輩のお嬢さんの遠藤理紗さんが、高校総体エペ種目で今年優勝したことは有名ですが、驚いたことに私の同期の斎藤君と野島（旧姓古山）さんの子供も高校でフェンシングを始めたということでした。

また、高校時代にコーチとしてお世話になった方のお嬢さんもジュニア十二歳以下の世界大会で優勝されており、新潟県のフェンシングの隆盛が楽しみとなっています。

今後とも新潟高校フェンシング部にも、いっそうの飛躍を期待しております。

お祝いに駆けつける。素晴らしい一日を体験させていただきました。

〈追記〉

青山ラガーの大先輩である歌代荘平さん（58回）が、昨年の秋の叙勲において、多年にわたる新潟県ラグビー協会での活動が認められ、旭日単光章を受勲されました。

'07「ボンクレバンド」および「総会」

吹奏楽部ＯＢ会長　上原　学（99回）

昨年も、吹奏楽部ＯＢ会恒例の「ボンクレバンド」が、八月十二日まるまる一日かけて、母校の視聴覚室で行われた。

とにかく、高校卒業以来楽器演奏から離れてしまった人、まだプレーヤの現役を続行しているが、たまに昔の仲間と一緒に吹きたい人、などなどおよそ十五名が参集。現役生の助っ人も加わって、視聴覚室のステージは一杯となる。「ボンクレ」とは銘うったものの、なかなか「クレ（暮れ）」は都合がつきにくかったり会場が確保できなかったりで、「ボン（盆）」だけになってしまっているが、それ故なおのこと「七夕」のように、年に一度の再会を喜び合う集まりともなっている。

さて、肝心の演奏の方だが、この日限りのバンド故、まじめに練習して曲を仕上げようなどという気は当初からさらさら無く、とにかく次から次へと配られる楽譜を「初見」でどんどん吹きまくる、叩きまくるのが恒例。しかも、誰か聴衆がいるわけでもないからなおさら気楽である。この日も演奏した曲は、定番の「マーチ・アルセナール」や今年の現役生のコンクール自由曲「コッペリア」などおよそ十五曲。指揮者は歴代の学生指揮者に時折現在の顧問も加わって、入れ替わり立ち替わりの様相。それでも何とか止まらずに最後まで音が出続けるのは、最近めきめきと腕を上げて吹奏楽コンクールでも県代表にたびたび名を連ねるようになってきた現役生のおかげか。それにひきかえ三十歳代に突入した草創期のＯＢ・ＯＧは青息吐息である。恐るべし！高校生！

さんざん楽器を吹いて疲れた後は、総会と懇親会を常席となっている古町の居酒屋にて開催。今年度の活動報告および会計決算を承認した後は、直ちに懇親会となる。ところで、酒の勢いでもないが、今年は創部二十周年、春に音楽文化会館で行う定期演奏会は十回目とメモリアルを迎えることが話題となる。ＯＢ会として何ができるか、現役生たちにどんな支援ができるかを考えようということで衆議一決、呼びかけ人を決めＯＢ会ホームページにアピールを掲載することとした。現在、着々と準備中であり、三月の定期演奏会までには形のあるものにしたいと意気込んでいるところである。

寄稿

「ただに血を盛る」の「弾」と「霊」

富所　強哉（46回）

六月の東京青山同窓会で配られた応援歌集を帰宅後に見ていて「ただに血を盛る」で「弾の響を伝えつつ」とあるのに気がついて気になっていたが、7月の総会で配られた歌集では「弾」でなく「霊」になっていた。

この歌の元歌が旧制第四高等学校（金沢・四高と略・他校も同様）の「南下軍の歌」であることは、会報などで紹介されたこともありよく知る会員も多いと思うが、その歌では「霊」となっている。考えると「弾の響き」では意が通らなく「霊」であるべきである。

手元にある昭和二十七年刊の創立六十周年記念「青陵回顧録」にも「弾」となっているので、相当前から（或いは私たちの在学時も）このようになっていたのであろう。昨年の総会での歌集がどうだったか分からないが、百周年記念のカセットテープの歌詞集と百十周年記念の名簿でも「弾」となっているから、その後に修正されたのであろう。

尚これに続く「不滅の真理先頭に」は南下軍の歌では「戦闘に」となっているが、我々の「先頭に」が相応しいと思う。尤も作詞者に何らかの意図があったのかも知れない。

この「南下軍の歌」は四高の代表的な歌として歌い続けられ他校でも広く知られたものだが、明治四十年に作られたもので、その歌詞に「洛陽」の語の他に京都の二三の地名があり、そもそも三高との戦いに京都へ進むのを南下と表したものと思われる。

当時高等学校（旧制）は明治二十七年の高等学校令の公布時からの東京・仙台・京都・金沢・熊本の一高～五高の五校に、その後六高（岡山）と七高（鹿児島）の二高が加わっただけで（名古屋の八高は翌四十一年）、金沢の四高の格好の対戦相手は京都の三高だけだったのである。

ちなみにその後できた高校を含み、各校にはこの歌のように夫々近隣の高校を対象とする歌が多く、旧制高校ＯＢ間で有名なものでは三高を対象とした六高の北進歌がある。

最後に私見であるが応援歌「空行く雁の」の元歌は松本高校のもので、その歌詞に「胡越」の語があり新潟高校を対象にしたものと思われる。よく知られるようにこの「胡」は昔の中国で東北の未開人を指し、自らを高く置き相手を見下した語であるが、このように相手を愚弄するような表現はこの種の歌に良く見られるようである。

『私の『坊ちゃん』を読む

小川　瑞枝（70回）

このたび、38回卒の近藤圓氏が私家本「私の『坊ちゃん』」を上梓された。氏にとっては、四冊目の私家本となる。

氏とは昨秋、とある画廊で紹介してもらったのが縁でお近づきにさせて頂き、思いがけず前述の本が恵送されて来た。単に青山の先輩、後輩と言う間柄なのに―。

氏の松山中学ならぬ「松江中学」体育教師時代の校長「岡虎（通称）」とのバトルから筆を起こし、自分史と言うより、明治・大正・昭和史の感が強い。

また、珠玉の様な逸話が随所に鏤められており、読み物としても面白い。例えば、氏の母のいとこの諸橋轍次（漢学者）と乃木大将との交流談。氏の島根県立工業学校勤務時代の隣人の画家の窮状を見兼ねて横山大観あてに手紙を出した話。教え子からの提供談として、日露戦争の際、廣瀬中佐が部下を案じ船内を探し回ったあげく戦死したが、その部下杉野兵曹長は命を取りとめ、帰還する際「日本では廣瀬中佐と共に戦死したことになっているので帰らないでくれ」と肉親に哀願され、満州で満人になりきって暮らしたとの秘話。

歴史書にない話が多く、また、氏の執筆意欲に脱帽である。一読をお薦めしたい。

これは，単発酵酒と呼ばれ，ワインがその代表格です。

一方，米などはそのままでは発酵しません。酵母がでんぷんを発酵できないからです。

そのため，一旦酵素によってでんぷんを糖に変え，それから酵母による発酵をさせることになります。これが複発酵酒です。

歴史的には，魏志倭人伝に『喪主哭泣，他人就歌舞飲酒。』『人性嗜酒。』と記されています。

また本県に関係したものとしては，奴奈川姫が大国主命に沼垂田（ぬまたれのた）で作った米で酒を造り捧げた。そしてその子　建御名方神（たてみなかたのかみ）が信州に移った後に奴奈川姫に酒を飲ませたと神話にあるそうです。

【新潟県の酒づくり】

本県は，古くから押しも押されぬ酒造り代表です。それは気候，風土によるところが多く，江戸時代には，寒造りの適地として酒造のシステムが完成しました。

気温を上げるより，下げるほうが難しいため，寒冷な地のほうが，微妙な温度管理（今では許容0.2℃とも言われる）ができること。その上，良質の米が取れること。そしてなにより冬季には，米作の余剰労働力が活用できること。

こうした酒造りの条件が揃っていました。

明治以降は，経験によって培われた酒造りのシステムを，醸造試験場が科学的に裏付け，また改良を続けてきました。

米どころ新潟の酒は，総出荷量でこそ兵庫，京都に及びませんが，吟醸，純米などの特定名称酒の出荷量では，全国の 20% を占めダントツです。

また，成人一人当たりの清酒消費量は，本県が 18.3 リットルで二位の秋田 13.0 を引き離しています。

つまりは，美味しいお酒を沢山飲んでいるということです。「美味しいから沢山飲んでいるのだ。」などという言い訳を使えそうです。

講師の渡邊さんは，場長として「新潟を世界に冠たるお酒の聖地にする」ために日夜努力（夜はどちらで？？）しているそうです。

我々青山の酒飲み一同は，渡邊さん，そして県内酒蔵の皆さんに感謝しつつ，健康にも留意しながらこれからも大いに飲もうではありませんか。

上原誠己（うえはらせいき）さん（77 回卒）

渡邊健一（わたなべけんいち）さん（82 回卒）

青山学術文化講演会　講師を囲んで大試飲会

栗原　道平（82 回）

昨年の青山学術文化講演会は、77回ご卒業の上原誠己先輩（五世鶴澤淺造、上原酒造㈱取締役社長室長）と82回のわれ等が同期生、渡邊健一君（新潟県醸造試験場長）が講師ということで、奇しくも酒造業界と縁の深いお二人が揃って講師を務めることになりました。渡邊君が「新潟の酒造り」という演題で講演をするからには、「酒は語るべきものならず、まずは大いに飲むべし」という崇高な理念の下、講演会終了後、両講師を囲んでの大試飲会を信濃川ウォーターシャトル「アナスタシア」号船上で開催致しました。

揃えたお酒は「鶴の友 上白」、「鶴の友 別撰」、「大洋盛 特別本醸造」、「麒麟山 伝 辛」、「越後鶴亀」、「白龍 本醸造」といずれも青山同窓と関係のある蔵元のお酒に限定し、渡邊君の解説と直接指導も織り交ぜながら、しばし船遊びの大宴会となりました。船を降りた後も、四次会まで宴は続き、お開きになる頃にはすっかり日付も変わっておりました。（筆者も最後は記憶がございません。）

最後に、今回取り揃えたお酒は、四合瓶でいずれも千円前後で購入できる手頃なお値段です。どこかで道を間違えたような我が国ですが、これだけレベルの高いお酒がこんなに安く飲める国は捨てたものではないなという気さえします。新潟の風土が育んだ新潟の地酒は、卓越した醸造技術に裏打ちされた世界に誇れる飲み物であり文化であると言えましょう。せっかく築き上げられた高度な伝統文化を廃れさせないよう、皆さんもっとお酒を飲みましょう。

第４回青山学術文化講演会開催報告

（平成 19 年 11 月 10 日　新潟高校において）

高橋　建造（84 回）

平成 19 年 11 月 10 日，恒例となった青山学術文化講演会が，第 4 回目として開催されました。

会場は，これも恒例の新潟高校視聴覚教室です。

生まれ変わった校舎にまだ一度も訪れたことのない方には，ぜひ次回の講演会にご参加いただきたいと思います。講演もさることながら，校舎のお勧めスポットです。大学の階段教室風で，内装に木をふんだんに使い，なんと 400 人を収容することのできる優れものです。

当日は，あいにくの雨模様でしたが，受付を始めると早々にお座りになった方も見え，関心の高さがうかがえました。

それもそのはずで，二人の講師のお一人目は，文楽の三味線と語りを一人でこなしてしまうという，類まれなパフォーマンスの，五世　鶴澤淺造こと，上原誠己さん。上原酒造株式会社の取締役社長室長でもいらっしゃいます。

そしてお二人目は，都道府県では，全国で唯一となった単独の醸造試験場　新潟県醸造試験場場長の渡邊健一さんです。

ここまでお読みいただいただけで，当日お越しにならなかった日本酒好きの同窓会員は，そろそろ後悔していらっしゃるのではないでしょうか。

以下，それぞれのご講演についてリポートします。

１．「義太夫について」

上原誠己（うえはらせいき）さん（77 回卒）
芸名　五世　鶴澤淺造（つるさわあさぞう）
（上原酒造㈱　取締役社長室長）

舞台には，座布団が敷かれ，三味線が横たわっています。上手には，太夫の道具である尻引き，オトシ，腹帯が置かれています。弾語りとなると，オトシや尻引きは使われないそうです。つまりは，太夫のために工夫され開発された道具を使わずに弾語りを行うところに，想像の及ばない難しさがあるのだろうと思います。

【義太夫との出会いと文楽座退座】

氏は，上原酒造の社長でお兄さんでもある上原誠一郎氏が舞台芸術に造詣が深かったこともあり，学業のかたわら？　歌舞伎や文楽，その他さまざまな舞台をごらんになったことがきっかけで，文楽に惹かれたとのことです。

しかしながら，当時の文楽への世間の関心は決して高いものではなく，一時は廃れるとも言われていたため，国による保存，伝承の取り組みが始まり，大学の在学中に国立劇場文楽座研修生の第一期生となりました。

てこ入れの時代の研修でしたので，人間国宝や芸術院会員など第一人者ばかりの講師陣から直接指導を受けることができ，振り返れば，世界一贅沢な 10 人の研修生のお一人だったとのこと。

25 年間の活躍は，避け得ない病気によって転機を迎え，文楽座を退座し家業の酒蔵を手伝うことになり，今に至っているのですが，『太棹三味線の弾語り』演奏家は，氏の知る限りでは氏以外にいないとのことで，酒造業の傍ら，再び五世　鶴澤淺造の活躍が始まっています。

【弾語り】

初めて拝見する太棹三味線の弾語りは，ギター同様のチューニング（調弦）からでした。笛の音に一弦を合わせた後に残りの二弦を合わせます。私の耳に間違いなければ，三弦の関係はド，ファ，ドです。

「壷坂観音霊験記」。そして，徳兵衛とお初の道行きを描いた，かの有名な「曽根崎心中」の聴き所をそれぞれ抜粋して演奏していただきました。

日本の芸術は，よく間（ま）の芸術と言われますが，文楽もやはりそれに違わないと感じます。

曽根崎心中のような名作になると，どんなに優れた映画監督が撮影した道行きの実写も，浄瑠璃を聞きながら観客の頭の中で想像される映像の饒舌さには叶わないのではないでしょうか。

当時，大変なヒットとなり，なんと心中が大流行し，幕府が心中禁止令を出すまでになったとのこと。

なるほど。

短い時間でしたが，その迫力の伝わる演奏でした。

２．「新潟の酒造り」

渡邊健一（わたなべけんいち）さん（82 回卒）
（新潟県醸造試験場　場長）

酒を飲むときに，（あまり長くない）酒造りのウンチクを聞きながら飲むと，いっそう美味しくなると思いませんか？

渡邊さんの一時間の講演は，酒好きには興味深くもあり，そして早く飲みたい気持ちにもさせられました。

【初期の酒】

初めての酒は，野山に生えている果物類が自然発酵したものではないかとのことです。たとえば山葡萄，サルナシ，木苺。

これらに含まれる糖分が酵母によって自然に発酵したものを動物が飲んでふらふらしているのを見て，人間が酒を発見したのでしょう。

母校は今

文化部大会成績

◎放送部

QK 杯校内放送コンクール

・アナウンス部門

1 位　2 年　川井　美晴　（北信越大会・全国大会出場）

・朗読部門

1 位　2 年　程　路霏　（北信越大会・全国大会出場）

3 位　2 年　石澤　浩子　（北信越大会・全国大会出場）

・テレビ番組部門

2 位　『心にふれて』　（北信越大会・全国大会出場）

◎吹奏楽部

西関東吹奏楽コンクール　銀賞

◎書道部

全日本高校生大学生書道展　大賞　3 年　久須美　智子

全国高等学校総合体育大会参加報告

フェンシング部三年　遠藤　理紗

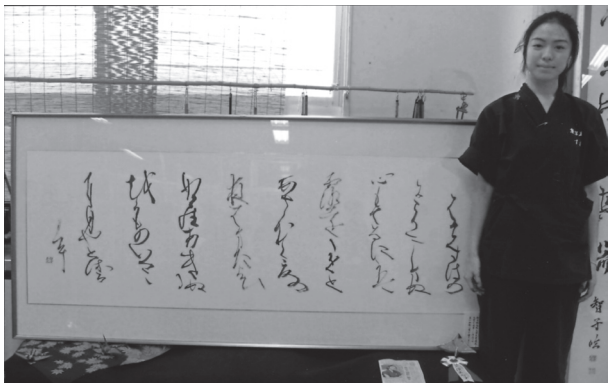
平成十九年八月七日～十一日に佐賀県嬉野市で行われた、全国高等学校総合体育大会に出場し、女子個人エペで優勝することができました。多くの皆様から励ましをいただきまして、本当にありがとうございました。

今回の大会は、前年の同大会で三位だったことや、世界大会出場経験があるということもあって、個人戦では今までにないくらいプレッシャーを感じました。ベスト八進出をかけた試合では、相手にタイムアップ直前にリードを許してしまい、もうだめかとも思いましたが、気持ちを切り替えて、最後まで目の前の一本をとることだけに集中することができました。緊張した分、優勝した時の喜びは大きかったです。

今回の大会を通して、私が今まで部活動に懸命に取り組むことができたのは、顧問の先生やＯＢの方々、部の仲間たちのおかげだと身にしみて感じました。新潟高校でフェンシングをやることができて本当に良かったと思っています。

書道部

三年　久須美　智子



今回の全日本高校・大学生書道展では、古今和歌集の夏の和歌二首を二尺×六尺の紙に書いた仮名の作品で書道展大賞というすばらしい賞を戴きました。

仮名を大きな紙に書くのは初めてで、半紙に書く時に特に気を付けている墨量の変化や行の響き合いに加え、空間のとり方や全体のまとまりには特に注意しました。仮名はまだ初心者で勉強不足なため、入賞の知らせを聞いた時は本当に驚きました。

受賞作の集められた作品展では、多くの書風に刺激をうけ、もっとたくさんの書に挑戦していきたいと感じました。

ご指導くださった小川先生、支えてくださった周りの方々、ありがとうございました。

今後も心、技共に更に精進していきたいと思います。

ピアノを寄贈いただいて

一年　倉元　真理

この度は、私たち新潟高校生のためにアップライトピアノを寄贈いただき、ありがとうございました。

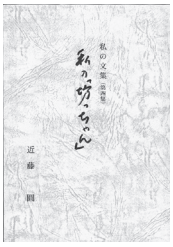
以前、私たちが使用していたピアノは「年代もの」で、弾いても音の出ないところがあったり音程が狂ったりしていました。けれども、それは長い間たくさんの生徒たちに使われてきた証でもあったわけです。

新しいピアノは、音楽室に設置されています。黒く光るピアノや真っ白な鍵盤を見るとうれしくなります。早朝に登校して弾いている人、休み時間に友人と弾きあって楽しんでいる人、音楽選択の授業のための練習をする人など、さまざまな人が活用しています。

今回いただいたピアノは、これから長い間弾かれつづけ親しまれていくことと思います。同窓会の諸先輩方のご好意に感謝し、大切に使っていきたいと思います。

※事務局より

「私の『坊ちゃん』」の筆者近藤圓（38回）さんより若干名の方に先着順で本を差し上げたいとの申し出ありました。ご連絡は同窓会事務局まで。



小野　秀子
上村　諭
菊池　隆宣
菊池　のぞみ
小池　雅彦
小林　亮介
小山　晃
坂上　富士男
佐藤　正昭
白井　一栄
鈴木　紀子
高橋　麗子
棚橋　忠
玉木　友二
津野　正裕
中山　真
長沼　正昭
羽鳥　敬彦
本間　政子
枡山　康二
山崎　元義

81 回Ｓ 48 年

相場　剛
朝井　豊
荒川　洋
五十嵐　公
片桐　裕則
鎌田　昭子
久須美　浩二
桑原　隆
小出　千秋
斉藤　直
坂田　光子
佐藤　弥生
澤口　昭一
霜鳥　雅徳
白石　義人
砂田　徹也
高橋　了子
竹石　尚史
田尻　美砂子
張　高明
富井　信喜
中沢　聡
中野　恭子
長北　敏弥
成澤　林太郎
平田　栄子
深津　茂夫
藤村　修
本間　寿晴
前川　徹
真壁　弘
松崎　美郎
村山　裕
山田　徹
鷲沢　直也
渡辺　昭雄
渡辺　真
鰐渕　博

82 回Ｓ 49 年

青木　定夫
荒川　育子
池田　勝久
石崎　昂一
稲井　晶子
大塚　英明
風間　隆
日下部　朋子
栗原　道平
幸村　克喜
小林　しほり
小林　立彦
小針　隆
駒井　早苗
斉藤　直子
坂上　極
佐々木　広介
佐藤　度
澤田　俊明
七里　佳代
島倉　晶子
高橋　英明
津野　吉裕
戸田　史朗
中林　昭裕
中林　二郎
野崎　秀明
生野　隆史
福田　勝之
本間　聡
真谷　誠祐
松浦　恵子
宮島　一敏
目黒　茂樹
八藤後　茂樹
山本　剛史
渡辺　健一
渡辺　宣昭

83 回　Ｓ 50 年

浅間　芳朗
天野　忠
五十嵐　謙一
伊藤　恵
今井　英雄
植木　秀功
牛木　宏子
枝並　幸男
遠藤　光郎
岡田　潔
荻荘　則幸
奥田　美佐都
風間　磨理子
河原　貢司
菊池　正俊
木下　康司
熊木　みや子
桑原　利枝
佐藤　悌二郎
佐藤　扶
鈴木　時男
高橋　克人
高橋　慶子
高山　佳郎
玉木　慎一
塚本　裕二
富山　武美
中戸　雅博
中山　徹
長澤　恵依子
西田　博子
藤崎　直美
藤田　祐子
古川　靖
本間　憲之
前川　正倫
丸田　拓雄
水原　章貴
村尾　弘子
森平　淳子
山口　虎彦
山田　進
横山　修
吉澤　篤
吉田　桂
吉田　徳治
吉水　敦
若杉　忍
渡辺　友昭
渡辺　正昭

84 回Ｓ 51 年

荒川　朋明
五十嵐　英一
今井　康晴
岡田　憲明
小黒　志津江
小林　正史
小山　芳明
近藤　公男
近藤　秀治
郷　秀人
郷　扶二子
斎藤　高秋
斉藤　忠志
高橋　建造
高橋　裕之
高山　有子
田崎　和之
野口　和子
畠野　達郎
丸山　正行
宮崎　清也
村上　誠
森岡　哲夫
行田　充
芳川　敦子

85 回Ｓ 52 年

雨木　若慶
石田　富美子
伊藤　正尚
岩崎　龍一
太田　淳
大沼　文男
奥村　基
笠原　徹
川村　和忠
桑原　敦志
佐藤　隆司
佐藤　由紀子
高須　洋子
高野　靖
高橋　覚
竹内　一彦
筒井　敦子
戸枝　秋夫
遠山　知良
長谷川　亮子
星山　松太郎
宮村　一明
村山　卓
若林　昌哉
脇野　裕子
渡辺　毅

86 回Ｓ 53 年

阿部　二郎
五十嵐　実
伊藤　健一
稲田　秀一
稲月　原
岡田　修司
小野島　恵次
加賀田　豊
小山　妙子
瀬谷　信一郎
高野　晃
高松　哲也
田中　照夫
玉木　正己
坪野　俊広
外山　真治
中川　佳代子
中山　均
西倉　直樹
林　光洋
丸山　徹
宮腰　重三郎
藪崎　裕
吉崎　芳明
渡辺　彩子
渡辺　政次

87 回Ｓ 54 年

荒川　一成
五十嵐　昌子
石川　裕之
井上　智
今西　博一
大西　千尋
大野　直子
大森　克利
荻荘　誠
奥村　克彦
押木　洋
加藤　真理子
清水　忠明
白柏　基宏
土屋　真規
林　恭弘
藤本　健介
本多　剛
松本　俊輔

88 回Ｓ 55 年

五十嵐　修一
池田　全之
石原　基規
江波　恒夫
岸　亮子
木村　裕毅
草間　博子
小林　久哉
小湊　知見
渋谷　聡
白井　栄一
鈴木　孝晴
常木　郁之輔
坪井　望
長谷川　章子
長谷川　健司
藤木　一浩
本間　候
三木　公一
峰本　義明
宗村　信明
吉田　巌
渡辺　治夫
渡辺　徳昭

89 回Ｓ 56 年

相場　恵美子
石栗　健一
市原　綾子
加島　彰二
倉田　裕一
桑名　謙治
田村　雅彦
通所　直樹
長谷川　雄一
星井　利樹
山上　浩志
渡邊　克彦

90 回Ｓ 57 年

五百川　浩
池　元太郎
岩谷　淳
儀同　政宏
齋藤　今日子
斎藤　俊弘
斎藤　道明
斉藤　恭広
坂田　文彦
白須　洋二
隅木　信利
袖山　敏明
田辺　文
田辺　裕美
田辺　靖貴
土屋　亨
富山　栄子
村上　恭子
村上　肇
渡辺　栄

91 回Ｓ 58 年

市川　健
風間　まゆみ
梶谷　敬子
後藤　透
早川　祐子
本間　正隆
横堀　真弓

92 回Ｓ 59 年

小野島　あゆみ
金井　利郎
河内　康志
北尾　彰朗
本多　晃
渡辺　二三枝

93 回Ｓ 60 年

行形　和滋
横井　裕

94 回Ｓ 61 年

櫻井　麻利子
佐藤　孝幸
花村　竜司
樋口　聡
柳本　和貴

95 回Ｓ 62 年

浅岡　俊宏
上杉　知之
田村　要介
中村　有里
町田　一越
山際　克也

96 回Ｓ 63 年

鈴木　周

97 回Ｈ 1 年

北西　奈穂子

98 回Ｈ 2 年

敦井　一友

99 回Ｈ 3 年

西山　浩美

100 回Ｈ 4 年

加藤　貴之

101 回Ｈ 5 年

今井　慶貴
打越　輝昌
小川　和恵

103 回Ｈ 7 年

伊藤　永朗
鷲尾　英一郎

105 回Ｈ 9 年

川合　健太郎
田中　健一
渡辺　千絵
渡辺　淳也

107 回Ｈ 11 年

宮島　望

111 回Ｈ 15 年

小甲　大輔

113 回Ｈ 17 年

渡辺　真光

114 回Ｈ 18 年

風間　祥子
川合　暢
高田　泰彰
中山　純平
山川　里美

115 回Ｈ 19 年

稲川　聡
小澤　芙美子
近　佳菜子
髙橋　明由実
塚崎　哲子
中野　隆裕
林　康貴
平田　太陽
藤崎　雅史
水野　幸一

通信制

1 回Ｓ 34 年

上重　正一

2 回Ｓ 35 年

桜井　修

4 回Ｓ 37 年

大谷　孝二
近藤　一弥

5 回Ｓ 38 年

菅原　カツ
高橋　一夫
星野　リエ

6 回Ｓ 39 年

井村　助治
関川　久子
髙橋　富榮
本保　銀一
山川　春雄
養田　太一郎

7 回Ｓ 40 年

片原　裕子
高橋　茂子
南場　健一

8 回Ｓ 41 年

新井　シン
金田　静江
小林　勝代
高橋　栄治
二瓶　保
間島　キソ子
松縄　清

9 回Ｓ 42 年

木村　美枝
白井　敏恵
橘　栄子
田村　清三郎
角田　清宣
松沢　美知子

10 回Ｓ 43 年

阿部　恭平
今井　明子
吉楽　政子
木ノ下　健次
佐藤　イチ子
立石　香代
脇川　久春
渡辺　洋子

11 回Ｓ 44 年

朝倉　八恵子
小林　幸子
広川　光子
牧野　榮策

12 回Ｓ 45 年

阿部　勇太郎
小野塚　操
斉藤　平三郎
田辺　辰次
田村　幸栄
中屋　春美
三國　令子
皆川　晃
吉野　久美子

13 回Ｓ 46 年

五十嵐　アイ子
中山　雅之
本保　勝晴
八木　清宣
山井　幸子
吉沢　利子

14 回Ｓ 47 年

川上　長市
監物　勝英
佐藤　隆英
伝川　末吉
宮澤　洋子
矢口　和三郎

15 回Ｓ 48 年

石月　一義
小松　朝子
山口　まり子

16 回Ｓ 49 年

梅田　和恵

17 回Ｓ 50 年

大橋　恒次

18 回Ｓ 51 年

渋谷　治紀
本間　れん子
矢部　恵三子

19 回Ｓ 52 年

勝島　テル子
佐藤　典子

20 回Ｓ 53 年

喜多村　勇夫
小島　英二
嶋田　博
清野　喜美男
山崎　忠治

21 回Ｓ 54 年

清野　義昭

22 回Ｓ 55 年

種村　昭久
種村　惠美子
戸嶋　孝
外山　トミエ
松原　俊昭
三原　仁美
向川　幸子
山口　安治郎
山本　ヤヨイ

23 回Ｓ 56 年

太田　光雄
岡部　徹
片桐　登

24 回Ｓ 57 年

今井　栄作
平井　節子

25 回Ｓ 58 年

網干　寿

26 回Ｓ 59 年

岡田　さない
加藤　キヌイ
清田　輝雄
南雲　トミイ
松柳　幸子
水澤　キヨ
山崎　喜男

27 回Ｓ 60 年

阿部　幸一
安倍　武勇
石川　孝子
岡田　忠雄
神田　絹子
熊田　照子
永野　正人
村山　春子
山田　幸子

28 回Ｓ 61 年

伊藤　雅子
長谷川　勇
星野　きよ子
渡辺　ハマ
渡辺　久子

29 回Ｓ 62 年

小島　綾子
佐々木　テイ
丸山　耕蔵
陽田　ナツ子
渡辺　文美子
渡辺　美恵子

30 回Ｓ 63 年

大箭　眞壽美
長濱　隆道
本多　孝一
増田　朋子
山井　芳子

31 回Ｈ 1 年

金子　よう
関　テル子
田巻　ナホ子

32 回Ｈ 2 年

伝川　里子
山賀　利夫

33 回Ｈ 3 年

津端　キヨ
渡辺　作司
渡辺　むつ子

34 回Ｈ 4 年

今井　純子
大橋　万希子
関川　亮子
田中　博子
水落　伊一
吉澤　ミエ
米山　賢治

35 回Ｈ 5 年

安達　啓子
逢坂　澄子
黒川　シヅ
福田　知恵子
武者　敏夫

36 回Ｈ 6 年

椎谷　郁子

37 回Ｈ 7 年

石川　昇
神林　早苗
笹川　薫
藤木　明美
横山　千代子

38 回Ｈ 8 年

木津　進
轡田　敏春
成田　二郎
古瀬　勝人

39 回Ｈ 9 年

安藤　智恵
小林　弘
吉野　一男

40 回Ｈ 10 年

飯島　イツ
曽我　昭仁
永原　正朋
星　恒市
本間　健一

41 回Ｈ 11 年

今井　久枝
菊池　智子
佐野　崇
本間　明子

42 回Ｈ 12 年

畔柳　圭
岡田　武雄
星野　レン子

43 回Ｈ 13 年

遠山　千代

44 回Ｈ 14 年

石原　マサ子
近　雄介
鈴木　邦彦
成田　こずえ

45 回Ｈ 15 年

大杉　貴美枝

46 回Ｈ 16 年

大崎　シズ
小柳　トミエ

47 回Ｈ 17 年

志賀　純子

48 回Ｈ 18 年

笹川　東子
髙津　修
宮島　仁

平成 18 年度青山同窓会収支決算書

（自　平成 18 年 4 月 1 日　至　平成 19 年 3 月 31 日）

（単位：円）

科　目	予算額	決算額	差異
前期繰越金	1,108,498	1,108,498	0
Ⅰ収入の部			
入会金収入	768,000	761,800	6,200
会費収入	5,700,000	6,305,100	△ 605,100
雑収入	1,000	102,435	△ 101,435
当期収入合計	6,469,000	7,169,335	△ 700,335
合計	7,577,498	8,277,833	△ 700,335
Ⅱ支出の部			
人件費	1,130,000	1,123,980	6,020
通信費	1,800,000	1,557,615	242,385
印刷費	480,000	433,700	46,300
慶弔費	100,000	124,118	△ 24,118
広報費	870,000	750,750	119,250
会議費	610,000	490,270	119,730
講演会費	200,000	221,552	△ 21,552
旅費	490,000	340,388	149,612
卒業生記念品費	300,000	271,876	28,124
補助費	1,270,000	1,131,365	138,635
退職積立預金	100,000	100,000	0
諸費	200,000	172,430	27,570
予備費	27,498	0	27,498
基本財産組入れ支出	0	100,000	△ 100,000
当期支出合計	7,577,498	6,818,044	759,454
当期収支差額	△ 1,108,498	351,291	△ 1,459,789
次期繰越金	0	1,459,789	△ 1,459,789
合計	7,577,498	8,277,833	△ 700,335

平成 19 年 4 月 11 日　上記の通り相違ないことを確認します。

監事　江口　良助　㊞
監事　渡辺　国夫　㊞

平成 19 年度青山同窓会収支予算書

（自　平成 19 年 4 月 1 日　至　平成 20 年 3 月 31 日）

（単位：円）

科　目	本年度予算額	前年度予算額	増減
収入の部			
繰越金	1,459,789	1,108,498	351,291
入会金	744,000	768,000	△ 24,000
会費	5,500,000	5,700,000	△ 200,000
雑収入	1,000	1,000	0
収入合計	6,245,000	6,469,000	△ 224,000
合計	7,704,789	7,577,498	127,291
支出の部			
人件費	1,140,000	1,130,000	10,000
通信費	1,700,000	1,800,000	△ 100,000
印刷費	480,000	480,000	0
慶弔費	150,000	100,000	50,000
広報費	870,000	870,000	0
会議費	610,000	610,000	0
講演会費	250,000	200,000	50,000
旅費	490,000	490,000	0
卒業生記念品代	300,000	300,000	0
補助費	1,270,000	1,270,000	0
退職積立預金	100,000	100,000	0
諸費	300,000	200,000	100,000
予備費	44,789	27,498	17,291
合計	7,704,789	7,577,498	127,291

渡部治子

69回S 36年

阿部治男
阿部正昭
池田正夫
石川健一
石本隆太郎
居城弘
今井昭雄
入山哲郎
内山康雄
大川昭一郎
大谷勝美
大森ゆかり
岡田尚子
小川敏孝
小黒朋弘
鍵富雅雄
笠原弘
加藤滉
鴨下守孝
木戸恵子
熊谷俊士
黒井幸一
桑原秀夫
小出紘
小島健二
小林昌二
斉藤国雄
坂爪征基
篠川旦
佐藤彬
佐藤孝靖
清水一男
白川英二郎
城田敬子
菅井幹夫
菅沼浩
鈴木将夫
高橋義教
高柳洋夫
田巻靖雄
敦井栄一
寺尾芳樹
轟栄次
富所忠男
堂垣内亨
長浜勝介
新田公子
野崎武敏
樋浦紘一
廣瀬淳之
細野義彦
本間譲
水野美智子
吉野国夫
両川政道

70回S 37年

浅川洋一
安達隆史
五十嵐健也
井口礼里
池田好正
石井幸子
石原俊夫
板屋越麟一
伊藤善允
猪口孝
今井正昭
岩脇秀廸
歌川亨一
江口光夫
大島勲
大塚哲夫
岡崎紘子
岡田利邦
小川弘良
小川瑞枝
笠原大仙
風間秋利
加藤邦紘
加藤清策
金子健三
川島崎夫
川田昌人
久代秀雄
栗山淳一
桑原和雄
小泉和代
小嶋桂吾
小林紀昭
小山正一
近藤東男
近藤光男
齋藤典子
斎藤忠正
斎藤秀則
斎藤弘道
酒井ゆき子
坂井政行
佐川幹恵
佐藤たみ
佐藤義秋
志賀安雄
品田悦孝
菅原一雄
杉本正義
関根俊明
高尾英明
高野義樹
瀧波祐助
武石正中
田中信
田中靖夫
田中由夫
田辺豊
土田紘一
鶴木勇夫
弦巻烈
出来島精一
内藤榮樹
中村啓二
中村重樹
成海哲男
新田誠一
西田牧衛
西丸功
能田直子
野川晃一
橋本修
花輪治
半谷万里
馬場照恵
坂西康英
日江井敦子
平山賢一
伏見省三
藤井朝子
藤井保男
藤田文雄
帆刈睦男
本田正樹
増田勝弥
松原紘
右田洋
水上和雄
水野邦生
三原邦夫
宮下忠雄
宮原卓
村田紀夫
村松信輔
山岸憲安
山口セツ
山田修
山田祥子
山宮士郎
横山治夫
吉田豊
鷲頭宏二
渡辺允雄
渡部美那実

71回S 38年

相田康夫
阿部尚平
阿部二郎
阿部敏弘
五十嵐和朗
五十嵐敦子
五十嵐修
石橋達弥
井田征夫
伊藤邦彦
伊藤登
伊藤勝
稲葉雅之
今井清治
植木巌根
内山博勝
大竹純夫
大野武男
大野義彰
大湊幸二
小黒俊彦
小田嶋壽広
風間英昭
柄沢卓
川上紘平
熊倉哲
小泉淑子
小杉修三
木間勝正
小林碧
近藤昌敏
近野茂
佐藤伸郎
佐藤正之
佐藤光武
佐藤礼子
菅原宗人
関屋真彦
高橋クニ
高橋健造
高橋豊
田辺龍治
中島紀博
中島正春
中野久
長井義輝
西埜孝樹
二宮武彦
野沢坦
野沢正樹
萩野真太郎
長谷川壽
長谷川守
羽生清
浜田敏克
平野晴夫
広野義隆
藤田昭彦
本田春雄
真柄成一
松原要
松谷邦憲
丸山鉄彦
丸山紀子
宮川善徳
宮下育子
村山薫
村山克夫
山内幹夫
山下進
山田征二郎
山本俊介

72回S 39年

青海道寛
赤川洋太郎
阿部勲
阿部雅子
阿部道行
荒井龍二
安中道夫
井海明
石井達夫
石黒義裕
石田庄
伊藤美智子
今井美知子
上沼歓子
上松正次
内山正義
大野義彦
落田真一
金子由征
神林賢治
北村誠作
黒木トシ子
小松久義
近藤正
斎藤古志
斉藤俊正
坂井俊明
笹谷秀穂
佐野正俊
渋井和夫
白井秀昭
鈴木彪
鈴木理子
祖父江邦子
高橋悦子
立川克雄
玉木功
塚原弘二
戸田満弘
冨田由李
中戸義興
成澤栄一
成澤虞美子
丹羽正之
根布秀子
橋本俊彦
樋浦孟
船岡信雄
古山恒夫
堀川武
本間政春
真柄顕一
牧野秀樹
松永宏五
松原和子
丸田尭
丸山武志
吉岡弘道
吉沢篤子
吉田秀穂
和久井和彦
渡辺一重
渡辺国夫
渡辺玄弥
渡辺毅之
渡部正敏

73回S 40年

阿部達也
雨宮則夫
飯村修
石川等
石田レイ子
稲野和夫
茨木憲一
上野秀夫
大沢義弘
大塚正夫
大野裕
岡村繁
小川幹夫
尾口基
小野塚眞一
笠井隆
片桐利雄
解良都代子
小林桂子
斉藤昭治
佐藤敏郎
篠田孝
清水洋
鈴木淳
関伶子
関野弘賢
高橋潔
高橋昇
高橋庸子
田中三郎
鶴木秀司
寺前直行
豊岡示朗
中野治
中原和之
南波祐二
野城真理
樋口正昭
平川博
藤田慶一郎
堀内徳吉
本間憲治
本間紀子
丸山澄夫
皆川雅朋
森敬治
山下俊彦
山田美成
鰐渕勉

74回S 41年

藍沢幹人
相場哲朗
相場文夫
五十嵐由之
石黒由孝
石本陽子
和泉潤
伊藤宏
稲葉伸雄
井上渉
薄田祥子
江口則男
遠藤京子
大江万里子
大島義宣
大田正孝
大滝均
大森寛
風間雄一
鹿島正裕
金井隆夫
金子吉一
加門文隆
賀谷正
川上耕
河崎順昭
河原一彦
木下真由美
桑原三恵
小池哲雄
小出信治
古賀良生
小竹孝之
坂上實
笹川雅之
佐藤俊栄
佐藤信秋
佐藤浩
佐藤裕信
志田常弘
鈴木勝紀
須藤寛彦
関憲一郎
関川修一
高木顕
高橋保
高橋信郎
高橋秀憲
高橋典久
竹之内明
田中秀明
塚野憲一
堤葵
堤芳夫
坪川藤夫
戸枝一明
富樫孝一
殿内重政
富澤慶栄
中村義一
永井明彦
西脇雄一
沼田清
波多腰明
平原茂行
広神俊彦
広野光子
広瀬秀
藤田文子
古川兵衛
古海正子
星山文義
本間正一郎
本間裕
松田邦宏
水本直弥
宮嶋良夫
村山績
森澤盾
谷内田健次
柳川紘三

75回S 42年

青柳豊
阿部秀作
阿部恒久
有薗順子
安藤裕司
五十嵐正
石川茂
石川忍
石澤政夫
石田彰
石田博樹
伊藤啓司
伊藤隆
伊藤哲夫
岩崎義則
上田茂
上原誠一郎
上原恒
植村由規夫
薄井勇
江口芳春
大瀧丈司
大塚惠子
大野道子
大原哲三
尾形幸生
押木泉
小旗一男
小柳幹夫
笠井忠
勝又宣夫
加藤博
川上滋
神田正一
北場勉
北村順作
木村陽子
小泉慈行
小島秀男
小島富美子
小山隆
斎藤昭雄
斎藤謙二
斎藤章二
斉藤みさ子
坂井克夫
坂井啓二
坂上泰治
坂元正広
佐藤邦雄
佐藤啓介
佐野幹雄
佐野康子
澤田俊朗
篠田昭
渋谷伸一
清水純
清水義晴
白井元
白玉謙一
鈴木正夫
千田克三
曽我正男
高木一宣
高橋清一
高橋正
高橋正明
高橋美樹
多賀美代蔵
田中章
田中純夫
田中壮太郎
田辺英志
田辺静幸
谷澤悦子
谷澤隆邦
玉井正光
玉木正一
田村啓一
塚本修
常山佐世子
富山修一
永井博子
仁多見康彦
野上紀雄
服部昭
萩野幸二
羽根愛子
檜ケ谷正道
樋口秀夫
廣川均
深沢義和
藤井春恵
星野雅博
堀一
本田晴久
本間均
松澤義明
丸山義博
三冨修
皆川信
宮純一
宮永進
武藤芳郎
村木洋子
村山謙一
村山勝
室塚泰二
百都健
八木健
山上卓夫
山口典男
山崎信行
山田宏明
山田優
山田美恵子
山根英郎
結城隆行
遊坐保三
若林雅
渡邊研二
渡邊勝斗
渡辺令子
渡辺新
渡辺秀雄
渡部信子

76回S 43年

相沢初美
青柳保子
味方富士雄
荒川秀夫
五十嵐博喜
石田芳博
稲葉徹
岩橋俊朗
海老豊
遠藤元信
大井戸佐紀夫
大橋誠五
小笠原徹
小田高久
恩田雅和
加澤正樹
梶井直文
加藤盛一
金内良雄
金子義伸
川上陽子
吉川洋志
北村幸輝
木下正仁
桐生和男
櫛谷さわ子
久住治
小島隆平
小林恒夫
小林博
近藤壽邦
齊藤幸治
斎藤栄路
坂上敏文
笹崎路子
佐藤俊雄
佐藤悠
佐野敬文
島垣誠
菅原正廣
鈴木茂夫
鈴木隆雄
鈴木正博
曽田修吉
高井正己
高倉まち子
高山豊雄
竹内誠司
竹内正
竹内輝義
武田英徳
田代雅春
田代良子
田中康一
太原まゆみ
田宮洋一
田村俊作
戸枝哲郎
栃倉幸一
中川英二
中俣正美
中山三喜栄
長井一彦
長北学
長沢菊男
名畑哲雄
西沢芳樹
根津則子
浜倉義昭
浜田正継
林誠
平野茂樹
廣川直紀
不二崎順二
細谷洋一
本図雅雄
本間村紀
松田行雄
三浦まゆみ
水間秀一
箕輪光泰
村山ひろみ
村山裕一
森田満
安田充年
山内春夫
湯本雅恵
吉岡俊
鷺尾栄作
渡辺力
渡辺春夫
渡辺拡
渡辺雅夫

77回S 44年

五十嵐久美子
石川鋭一
遠藤良二
大塚忠雄
尾崎邦明
片山等
加藤輝夫
川崎俊一
神部昭
北村一雄
木村廉平
桑原彰子
小林悟
近藤敬
斎藤繁夫
斉藤憲
佐藤茂
佐藤壽秀
清水道雄
杉崎真実子
瀬野正英
高野孝治
田中悦子
田中裕介
田原隆夫
永井恵一
永井透
西和男
生野勝
長谷川次郎
長谷川正
波田野節子
日野浦広昭
桝山健一
松崎澄義
水野義行

78回S 45年

青木孝一
五十嵐祐司
板井一彦
伊東真知子
岩城文夫
岩瀬耕一
遠藤和男
大久保昌邦
太田祐一
小田勇司
小野真知子
金沢宏
金沢泰子
木村和夫
久住民男
熊木徳次郎
小林和人
小林辰次
小林直毅
笹川孝子
澤田清
志藤洋子
清水幸栄
曽根正
高橋隆
滝沢恒世
土谷厚
長谷川まこと
福原等
水野秀樹
皆川信子
向井美夜子
山崎一正
吉澤哲彦

79回S 46年

青山義明
浅井敬一
五十嵐康之
石井智裕
石田まさ子
井上隆二
猪股裕紀洋
今井誠
今井幹文
植木秀任
江花和郎
大野俊治
岡島初
岡田均
勝山昇
河正子
川合清司
川合千尋
川上康夫
河野雅子
北原宏一
木村泰博
久保田愛子
倉田由美
桑原直樹
小泉仲之
小林潤一
笹川富士雄
佐々木隆輔
佐藤和明
佐藤久一
佐藤晃一
佐藤たつ子
佐藤俊夫
佐藤富士夫
佐藤玲子
三膳義久
庄司義興
白井行雄
新保博史
鈴木正昭
髙橋淳二
髙橋正良
髙橋由和
田阪憲昭
田中隆
玉井美穂
豊島宗厚
内藤真一
中川徹
野島常雄
野村正史
林睦
広嶋顕
藤井大三郎
藤巻則夫
保苅俊治
本間義康
丸潟孝
三保恵美子
村井圭子
横川憲司
横山由美子
吉田至夫

80回S 47年

池淳一
伊藤明
伊藤俊輔
植木邦彦
扇嘉明
太田啓子
大塚善紀
小片守

渋木幸三
島崎毅
白井三男
鈴木誠一
関根彰一圓
関根亨
関野光弘
高橋晴夫
高橋正利
高橋陽一
高見忠
高山昇二郎
種岡健
塚田俊夫
中野文郎
中野誠
中村彰
長島一郎
納谷喜郎
西脇諭
能登省三
畠中勝
花井進
早山康之
樋口卓
広野樹
藤田八郎
藤由学
藤原幸雄
堀川兵一
三崎良次
皆川潔
宮田兼好
八島敏弥
山田和雄
山田一介
山宮英世
山吉一成
吉川篤
吉川文雄
吉田陽吾
渡辺初男
渡辺満

60 回Ｓ 27 年

井海孝
五十嵐邦一
五十嵐健一
五十嵐弘
伊狩三喜男
池浦厚司
池端哲
石川紀一郎
石黒忠士
泉精司
市川豊
入山文郎
上杉雅之
内山真一
大井忠史
大田英男
岡村嘉志
小川秋実
奥田達也
落合夏樹
甲斐佐智男
加賀田實
笠原功
片岡眞
金山常吉
河田鐵雄
神田三夫
切貫久司
櫛谷不二男
熊谷忍
熊倉登
熊田彰
玄間敏雄
小石光夫
小出直
小島洋吉
小林賢一
小林庄一郎
小林進一郎
小林亨
小林智明
小山功
齋木守雄
齋藤卓史
斉藤邦夫
坂井丈夫
佐々木城
清水悌作
杉野剛博教
杉谷一章司
鈴木章雄
高城英之
高野信進
高橋栄明
高橋栄浩
田中浩一
田辺寛
玉木文夫
田村和郎
戸川正弘
徳田浩一
富田悦治
富山和夫
富山佑男
外山照夫
豊岡隆
中村信夫
中山弘
長橋洸
成田禎作
西脇満
野村保夫
橋本行雄
長谷川秀三
濱田達三
早武正博
平田大六
広瀬欽次郎
福田博
星野昭夫
星野昇
丸山敏視
向井和夫
宗村健吾
矢川和偉
山崎健
山崎賢隆
山崎峯平
山田誠
山本淳夫
渡邊修
渡辺晃二
渡辺正雄
渡辺祐吉

61 回Ｓ 28 年

赤堀和郎
浅野道子
浅見昭夫
安宅久憲
阿部徳治郎
安藤友憲
池田元嘉
石井壯一
石山謹治
居城慶一
伊藤英子
伊藤良介
今井晃
江口良助
江村隆三
太田賢輔
太田二郎
大滝儷子
大野恭信
奥村啓一
加藤栄一
金子章
川井達夫
川崎栄一
河辺明彦
岸田哲男
北村富士雄
木村磐
木村昇
木村政雄
熊谷隆幸
倉茂周典
小出廣記
小嶋哲夫
小杉秀一
小林貞夫
小林稔
小林元雄
斎藤義明
坂田安之輔
佐々木繁
佐藤建一
佐藤敏眞夫
佐藤眞和夫
三條明
塩谷實
柴田良
柴野淳栄
清水栄三
須貝伸明
菅原和雄
助川孝三
鈴木正之
巣山誠理
関根洋
高浪照
高橋均
高橋龍威
滝沢哲也
竹山恒宣
田中忠夫
田中常武
富川龍雄
中村龍雄
庭山熙彦
野俣徹
羽賀博
長谷川康一
長谷川耕一
長谷川義明
浜口福寿
番場道夫
藤井真夫
藤田宏
藤原信雄
古沢善文
本間淑人
湊秀平
向川恒
村田俶
村山国弥
村山健
谷田部信
矢田昌三
山田成吾
横村一郎
結城隆一
若林瑞穂
渡辺和義
渡辺皐哉
和田照子

62 回Ｓ 29 年

青柳正男
安食恒昭
五十嵐昭雄
池田昌之
石黒恒
石田忠郎
石田寛
石田幸夫
岩渕眞
上原明
内山一雄
内山隆之
大高康介
大西浩一
小黒昌一
貝津徳男
貝沼由紀
梶井啓右
加藤美明
角家孝之
神成粛一
木村望
木村亮
小池健治
河野開
小島研也
小林政弘
近綾子
近藤琢也
近藤哲朗
斎藤晃生
斎藤健
坂井幸男
佐藤勝彦
佐藤晃一郎
佐藤恰
佐藤誠也
佐藤武司
佐藤直彦
重野幸
白井愛
杉内夫
鈴木哲夫
鈴木徳義
曽我健
高橋健一
田子元
田中昭夫
田中毅
田村貫次郎
田村恭子
遠山晴夫
中川洋吉
中島寛
中村洋二郎
中村義一
西野勲
長谷川舜治
長谷川愫
長谷川守英
原滋正
原正雄
平田邦夫
平原康男
広野耕一
福田生圭
藤巻陽三
藤山岑子
藤原宏典
帆苅栄
星野陸夫
堀栄一
堀口忠五
真壁伍郎
枡山純
町田仁
丸田宥吉
三國龍彦
三崎成夫
水野一
皆川重
嶺國
宮沢敏夫
村木修
村木隆
村山悦朗
守口隆夫
山川廣俊
結城俊郎
渡邊冨二雄
渡辺貢英
渡辺順司
渡辺哲也
渡辺真

63 回Ｓ 30 年

間潔
赤羽良樹
浅野康一
阿部聡
阿部達
荒井正
五十嵐健治
五十嵐信一郎
五十嵐房子
池治男
石川庄吾
居城正二
市井吉三郎
市川瑞夫
伊藤寿介
伊南純雄
今井幸雄
江口律子
大坂敏
太田滋
大橋道雄
小畑忠夫
会正之
柏正
片桐重雄
金川博
加野英資
北村壽一
倉品省三
栗田雄三
計良伸正
小島不二
小林章営
小林俊雄
小林洋一
小林洋子
近藤昌泰
斎藤勝一
坂井権
坂上種男
櫻井競
佐藤博之
佐藤正明
杉山弘道
鈴木恒夫
相墨直彦
相馬潔
高木研三
高木章介
高橋知義
高橋昌生
瀧澤正元
瀧澤一彦
竹山行三
田中貞夫
大坂伝衛
千種富生
土田浩平
土屋信之
寺島雅範
戸井田一美
中村瑛
中村輝一
中村道衛
二階堂修
西名英輔
西村允
西脇重孝
庭山昌明
長谷川潤治
長谷川正
馬場政説
平原正男
藤井尚治
藤井洋
保苅由紀子
本田良二
松井光一
松本欣一
真山俊
三浦喜代次
水落義樹
南満寿子
村山弘義
山田恵一
山田豊
山根晴子
山本弘司
湯浅一平
横田美昭
吉田奎介
渡辺昌夫
渡辺要一郎
和田和男

64 回Ｓ 31 年

青木信道
阿部欣司
安藤勝利
石井正巳
植村鞆音
内海公子
江口一弥
大石正晃
太田健治
大槻修三
小熊甚吉
小田嶋寿一
籠島廣
風間士郎
片桐彰子
柄沢茂
川崎明
菊地可寿子
北村市郎
熊谷勝
桑野光雄
小出達也
小林脩
駒形裕二
近信雄
斉木幸彦
坂井俊一
坂井敬
佐川清士
佐藤章
佐藤幸治
佐藤唯司
椎名睦郎
柴田史朗
嶋岡洵
清水裕子
清水良男
白根修
鈴木厚生
鈴木喬
高木睦弘
高橋俊之助
高橋喬樹
高橋洋
田才邦彦
田代壮治朗
立川實
田中中堅一郎
田中恒夫
田辺元彦
谷久
田伏正樹
田巻亮
田村康一
千原久人
塚本暉磨
津野慶浩
坪井正康
中林弘
庭山暢彦
畑野晋也
廣川祐之
藤沢靖郎
星満
星野邦彦
本間義章
村山俊
森田一郎
山崎雅司
山根伸之
吉川要輔
若槻晃一

65 回Ｓ 32 年

浅田和之
安食悟朗
安宅厚
阿部明子
阿部喜久子
阿部直
阿部正躬
荒川哲夫
飯野勝栄
池隆史
石田三郎
泉達尚
市原民郎
伊藤不二男
植木昭彦
梅田和良
大崎一治
大橋修一
大堀隆夫
小川正
小栗政夫
尾崎元
小沢征夫
笠原成美
風間美禰
加藤純一
金巻啓司郎
川合英次
川上嘉寿雄
河路明夫
神林恒道
木滑孝一
久保田泰雄
小林茂
近藤昭雄
近藤良雄
佐藤勝弘
佐藤孝
三林輝夫
三林美奈子
柴澤大五郎
清水正夫
白井三雄
鈴木達昭
鈴木恒
高橋貞夫
滝澤敏郎
田中実
田辺建一
田中野三義
南場良博
難波勝平
二木央
根津重行
野崎睦美
半澤貢
樋口宜久
広瀬啓子
伏見勝也
藤井青
堀川芳男
本間忠彦
本間英男
松木美智子
丸山一敏
三浦進次
水野左敏
宮川忠和
村山黄三郎
山崎耕一
山田松寿
山本和親
鎗居成治
吉井士郎
吉田治彦
吉田穂積
渡辺正宣

66 回Ｓ 33 年

青木一男
青木忠允
行形和也
池政男
池田葵
今井正雄
薄田芳丸
内田定寛
榎並義允
小川亮一
小木順一郎
乙川正次
風間聰一
加藤孝子
加藤靖夫
金子兼三
金子義信
神田征輝
熊谷國男
小泉正俊
小林啓志
小林裕子
里村和彦
塩谷芳彦
下川友也
鈴木興春
鈴木幸
鈴木滋弥
鈴木隆
鈴木博
関篤司
関本敏雄
高島敬子
高島文治
高野弘
多賀浩子
竹石健一
田中澄夫
田村元吉
富田俊枝
中谷藤太郎
二宮靖彦
野水宏樹
野水雅行
橋本誠
橋本梁
長谷川精一
半澤弥栄子
平田孝夫
広沢憲隆
福地利明
古沢満
星莞二
本間請子
松沢孝
丸岡央
宮沢一彦
村木健二
矢部直子
山口喜康
山口信
山崎稔
横瀬功
吉田六左エ門
渡辺喜光
渡辺正弘
渡辺操

67 回Ｓ 34 年

味方繁夫
阿部智
阿部尭
池隆夫
石井紀男
石井幹男
石田瑞穂
市原昭一
伊藤紀朗
井上一郎
今泉信作
大滝正通
大野敏昭
岡崎功
小川トモエ
小川宏
奥村紀男
小沢秀雄
鍵冨靖雄
片桐英彦
加藤弘
金井邦紀
川崎ヒロ子
川崎昌彦
岸田興治
北川寛
北沢和夫
北場勝也
君英夫
木村美智子
倉島邦彦
桑山哲治
小林晋一
近藤栄子
斉藤久美子
阪西裕子
佐川八重子
佐々木邦夫
塩原満
清水雄伍
白井節
菅沼重登
杉山直久
関根昭一
瀬下一三
高倉亨
高野宏一
高橋耿平
高橋三郎仁
高橋輝雄
高橋直也
高橋信夫
滝沢元
田中収
田中直史
玉木直子
寺井宏
戸松秀雄
堂垣内弘一
中野仁
那須野昌弘
橋本秀子
濱田達郎
原敬治
原敏明
一柳肇
広野達彦
福山忠昌
星允
堀川楊
本間寛
前川倫子
松井建吾
松川哲之助
松島啓二
丸山鉄弥
丸山真三男
見田進
村山実
山口文夫
山田尚男
山田穣
吉田一郎
渡部透
渡辺脩

68 回Ｓ 35 年

赤塚五十二
安達賢司
安孫子晋治
阿部俊明
阿部尚武
伊佐早幸男
石黒正子
石橋輝樹
板垣昭男
伊藤昌太郎
岩原修爾
大橋昌徳
岡庭治行
河西厚
片桐靖孝
加藤健一
加藤達雄
加藤トモ
上村敦子
上村晃一
上村嶺子
川嵜建治
北村泰作
草野佐
小林勲
小林正昭
駒林進四郎
近藤和久
近藤義雄
今野公和
齋藤重信
齋藤正果
佐藤敏
佐藤泰二
佐藤広則
志賀惇
鈴木喜也
関隆二
関川利男
関口徹雄
関根紀一郎
関野敏
高見潔
滝沢猛
竹石肇
田中康一
田中宣男
田中光弥
池主憲夫
塚本孝栄
土田正
寺尾正大
中島輝雄
中村秀子
中山紀代子
西原徹
浜田庄司
原田衛
広川忠夫
福田良子
藤崎昌彦
藤田実
古舘信生
星野敬
堀内孝
本田建一
増子藤男
松原伸子
儘田澪子
丸山弘
森田浩二
梁取健
横山清夫
若松昌弘

平成 19 年度
青山同窓会会費納入者

（4月より9月末まで納入のもの）

会費を納入していただきますと「青山同窓会報」を毎号お届けいたします。申し訳ありませんが、納入のない方には「会報」をお送りすることができなくなってしまいます。未納の方は是非3月までにお振り込みくださいますようお願い申し上げます。

1口　1，000円。

できるだけ2口以上でお願いいたします。

振込先：郵便振替口座
全日制　00650−7−4455　青山同窓会
通信制　00530−1−74207
青山通教部会

全日制

35回S 3年
岡　四四亥
36回S 4年
風間　忠雄
田中　武
37回S 5年
黒川　武三郎
鈴木　正二
田中　正二
野末　武夫
38回S 6年
桶谷　勇策
近藤　圓
関屋　俊彦
田村　勇作
真柄　一衛
39回S 7年
池田　藤三
上原　虎雄
小林　芳輔
山下　八郎
40回S 8年
会田　俊雄
児玉　親典
鈴木　保穂
高田　信川
池主　憲
真柄　慎平
山田　金次郎
41回S 9年
阿部　久二
五十嵐　富郎
伊藤　一雄
今成　隼次
上原　喜八郎
金子　清
神田　明
洪野　玄彰
高田　弥彦
長野　庫治
富澤　五郎
野末　正二
八木　勝
42回S 10年
今井　包和
岡田　龍雄
東城　真佐男
広沢　斉
前田　隆英
43回S 11年
阿坂　英夫
鍵冨　馨
加藤　行輝
菊池　芳郎
笹川　謙録
田中　憲司
富所　正巳
浜田　昌栄
早船　春洋
丸山　直威
森田　五郎
山際　正雄
渡部　一郎
44回S 12年
今井　仁
小原　康作
金子　一夫
小池　寿哉
小泉　大三
斉藤　伸雄
坂井　健一
高野　伸三
錦織　登美夫
西山　尚三
早川　廣吉
平原　芳郎
星野　圭
本田　一郎
峯木　鉄夫
宮川　一郎
宮沢　正彦
45回S 13年
笠原　義春
金井　弥寿郎
小島　平弥
酒井　敏行
坂爪　力
渋谷　芳二
白倉　丘
関崎　睦男
滝澤　久衛
知野　正
寺山　恒男
中村　國夫
橋本　良材
長谷川　渙
長谷川　健次郎
治　雅樹
円山　哲四郎
丸山　泰雄
山際　昌介
綿井　兵衛
46回S 14年
安沢　惣平
稲野　藤三郎
江口　松弘
大津　任
鍵冨　春雄
金子　政太郎
熊谷　大輔
佐藤　正利
下　勇
菅原　一房
高橋　敬吉
近沢　一
手島　恵昭
富所　強哉
原　泰三
馬場　吉衛
樋浦　幸喜
広川　敏郎
藤巻　貫
堀川　良平
本田　富雄
横山　隆二
米原　進
47回S 15年
青山　信一
伊藤　元司
岩谷　又武
倉井　整
古寺　鴻
清水　善夫
菅井　隆一
高梨　正夫
中野　忠雄
中村　正秀
新津　義雄
広川　博
藤田　三之助
丸山　銕治
森田　美寛
吉田　富忠
48回S 16年
秋元　俊明
天田　孝平
五十嵐　晧太
伊藤　正太郎
江口　正喜
樫　基
北村　英朗
小池　清泰
斉藤　力
佐藤　忠一郎
佐藤　素一
杉山　静也
鈴木　勇
諏訪　宏
高松　利男
土田　節也
内藤　啓一
廣瀬　努
本間　五夫
真嶋　明
水戸　正郎
望月　彰
八木　正
吉川　三吉
渡辺　鋲作
49回S 17年
飯島　三良
池田　眞吾
稲泉　武男
井上　正
逢坂　邦雄
逢坂　猛男
乙川　順二
梶山　勝清
亀山　宏平
木村　竜一
工藤　弘安
小林　幸男
駒林　行弘
斎藤　俊八郎
斎藤　増栄
酒井　忠正
佐藤　武雄
佐藤　博
清水　直彦
白川　保
高橋　幸一
高橋　政弥
高山　昇一
滝沢　信義
竹山　行雄
田中　久盛
池主　淳
中村　五郎
中村　廣徳
永松　一久
仁保　武人
庭山　清八郎
畑　新次
幡新　守也
濱　博世
原田　湛玄
広川　弘
弘中　博元
藤田　芳郎
舟崎　裕二郎
堀内　憲政
本田　正弧
水本　正弥
山口　正十三
山口　実
山崎　武
50回S 18年
五十嵐　喜八郎
五十嵐　清
池田　成德
池田　信彦
石崎　浩
犬井　政榮
今井　弘
岩男　仁志
岩沢　信夫
江口　晃
大石　正信
大川　正彦
岡田　一郎
勝見　秀也
金巻　昇
上村　光司
苅部　洋太郎
神田　正弥
北村　豪郎
轡田　勝彌
小林　淳郎
渋谷　武
関　文雄
瀬谷　誠
高橋　忠行
竹田　忠夫
田中　賢治
田辺　尚雄
大黒　善弥
鶴田　寛
寺田　秀夫
時田　勇司
中川　赫雄
中林　茂之
中村　一郎
長谷川　健作
長谷川　陽三
原田　敏一
馬場　賢一
福原　久
藤井　義良
布施　栄明
古川　聰
堀　信誠
本間　生
真柄　三夫
水野　哲郎
宮島　新一
村山　一
山岸　芳郎
山田　璋治
吉澤　績
吉村　武郎
渡辺　欣次
渡辺　進
51回S 19年
青木　博夫
浅見　信夫
厚地　武
荒井　奥弘
五十嵐　健之輔
今泉　笑顔
歌川　正博
永木　昭治
大関　雄策
大滝　映夫
大山　龍蔵
岡村　安雄
岡本　耕治
梶井　功
金子　富策
河路　渡
川瀬　熙
北村　茂
小林　欣一
小林　愼治
小宮　富郎
斉藤　素一
斉藤　了
坂井　慎
笹川　重男
嶋岡　強
菅野　浩
鈴木　誠二
巣山　恵人
高橋　義和
田中　敏朗
田中　秀夫
千葉　繁太
野瀬　弘一
長谷川　直大
波田野　勇松
花井　省次
藤井　一郎
藤井　英克
細貝　繁男
真島　建
真野　量次
三村　一郎
宮島　芳郎
村上　安仁
百川　和雄
八木野　恒夫
山田　精一郎
横木　義男
52回S 20年
青山　秀
阿部　秋由
阿部　和夫
阿部　晃介
阿部　次夫
安東　道夫
安藤　一郎
石崎　昭一
大野　潤豊
岡崎　昭児
奥山　實
小熊　鐵也
小黒　和隆
乙川　良英
折戸　睦男
金居　直
河端　昭二
北嶋　益二
小島　嘉彦
齋藤　泰五郎
斎藤　茂美
斎藤　志郎
坂井　和夫
佐藤　秀夫
佐藤　陽二
佐藤　隆三
里見　義泰
澤田　義郎
柴田　利一郎
真保　禎二
鈴木　昭
関口　次郎
高橋　良雄
田中　昭治
田中　長助
坪谷　誠
富取　徳夫
中川　義郎
永井　淳一
成田　昭一
野崎　一朗
能登　彰夫
橋本　義行
早川　蓁之助
廣川　勲
廣川　昭二
藤田　禮一
古川　幸夫
細貝　敏雄
本田　等
本間　英治
本間　昭三
三井田　彦二
皆川　洋作
村島　滋
村山　玄二郎
森　重郎
山崎　利兵衛
吉田　赳
渡邊　亘
亘　隆
53回S 20年
浅海　典
阿部　定一
荒木　典雄
飯島　銈良
飯野　俊栄
石沢　嘉彦
板津　尭
一柳　邦男
稲月　作之助
岩永　千年
上杉　純一
内山　昭三
大倉　憲吾
大谷　邦夫
小黒　昌夫
小島　久雄
小林　茂孝
小林　松郎
近　泰男
坂井　武夫
桜井　智
笹川　徳義
佐藤　昭太郎
渋谷　興司
白井　勇
白井　道夫
鈴木　俊英
鈴木　隆造
関根　光雄
高木　秀夫
高橋　英一
高橋　勝彦
高松　和丸
高山　義一郎
田崎　国夫
玉木　將二郎
丹後　源太郎
長　道雄
津野　務
寺崎　哲夫
中村　弘道
中山　政夫
長場　雅
野口　国典
野口　俊作
野瀬　寛次
野田　栄次郎
広川　勇
広沢　功
藤　正彦
藤田　英治
藤田　秀夫
堀　時男
本田　正英
本間　敏雄
前川　治一
正木　宏
桝潟　昭夫
松本　伸一
三野　昭三
盛山　淑郎
諸橋　莞治
山作　房之輔
山崎　典夫
山田　豊
渡辺　義隆
54回S 21年
石橋　丈夫
磯部　昭一
斎藤　雅彦
佐藤　壮一
保倉　修
保倉　保興
細野　助栄
本田　茂
55回S 22年
青山　昭郎
浅妻　昭三
阿尻　威吾
新井　勝龍
石本　林三
伊藤　健二郎
今井　兼智
今湊　良敬
大島　壮一
片岡　啓一郎
片桐　武昭
勝見　聡也
金井　良司
金子　隆弘
川井　和夫
川崎　貞夫
川又　敏郎
小島　健一
小山　和夫
笹谷　哲也
庄司　元一
渋木　登
進藤　仁一
鈴木　俊雄
砂山　晃
関根　博
早福　卓
高橋　安
千葉　繁治
土田　達禅
常木　剛
等々力　和男
富所　寿男
外山　清
中田　繁夫
中村　幹男
中山　昌麿
西脇　進
長谷川　直人
長谷川　政彦
平山　顕二
星井　正春
本間　義治
前田　利雄
真谷　誠慧
松浦　徳雄
松本　明芳
三村　一男
宮尾　益敏
武藤　輝一
村山　義夫
守口　一郎
山崎　賢二
山田　甚平
山田　源行
吉澤　有介
吉田　哲雄
吉原　賢二
米山　俊彦
56回S 23年
赤坂　長弥
朝比奈　和三
阿部　弘昭
網干　道雄
荒川　昭寿
市川　久純
伊藤　泰夫
今城　信敬
岩瀬　玲二
上田　宏
浦野　説衛
江口　直禎
遠藤　昭伍
大竹　多計二郎
大沼　淳
大野　利夫
岡田　弘夫
小田　一彦
折戸　善衛
貝沼　知男
笠原　健一郎
加藤　勝則
金子　昌次郎
岸野　健一
久保田　剛敏
小嶋　芳郎
古寺　嘉夫
小林　隆太郎
近藤　源也
斉藤　恒
坂井　恒雄
佐藤　晃威
清野　誠二
髙塚　勝吉
高橋　忠
高原　哲雄
田中　孝
田中　陽一
中山　昭一
中由　正男
南雲　照三
庭山　六郎
野沢　英雄
早川　潔
原　英二
伴　昭彦
廣川　宏
藤井　泰介
星野　健二
堀　藤四郎
松井　昭五
松尾　直樹
三上　昌
三崎　正一
村川　順三
目黒　剛
山崎　洪二
山本　幸正
横山　芳郎
若槻　馨
渡部　義一
57回S 24年
大川　進
川口　政行
清川　坦
駒形　勇松
鈴木　廣
中野　進
福田　克彦
室谷　昇平
58回S 25年
青柳　廣士
赤塚　行司
阿部　隆
池田　成義
植村　末哉
歌代　荘平
内山　準之助
遠藤　整治
遠藤　照雄
大関　允良
大山　芳郎
岡田　耕衛
奥村　陽彦
小熊　勇司
笠原　忠克
風間　庫一郎
片桐　欣哉
加藤　吉策
加藤　高弘
金沢　栄二
金子　忠
神田　勉
木村　善章
小林　一男
小林　正吉
近　寅彦
近藤　信夫
斉木　利雄
斉藤　茂
坂井　熙一
坂井　春夫
佐藤　明夫
佐藤　俊彦
佐藤　弘
里村　専精
白井　博
曽我　浩
高田　龍介
高橋　昭吾
種村　祥一
中川　弘
永井　勝雄
長浜　利夫
波田野　松重
浜田　正昭
早川　哲夫
平田　次彦
平山　詩郷
福島　惣吉
藤崎　茂
藤村　洋
堀田　利雄
細貝　実
堀　新二
堀内　俊夫
本間　庄二
前田　三郎
間島　速雄
松浦　祥夫
丸山　幸男
皆川　敦
宮川　幸司
宮沢　昭
望月　和明
本永　祐嗣
矢野　教
山谷　晧榮
山田　寛
行田　宏
渡辺　達夫
渡部　豊悦
和田　憲雄
59回S 26年
相川　義信
青木　久馬
青柳　実
旭　祐善
安倍　邦造
新川　滋
飯塚　実
飯村　康一
五十嵐　哲夫
池田　修次
伊佐　修
市川　鉄夫
伊藤　瑞
井上　俊男
宇佐美　裕三
牛木　素吉郎
園城　英二
大石　正夫
大川　健
大島　洋一
岡田　久
奥村　繁樹
小熊　英夫
小野寺　宏
小柳　佳一郎
笠井　駿
金巻　久
唐津　和雄
河合　德壽
川上　昭八郎
川上　忠男
菊地　晴彦
菊池　裕
清野　孝一
倉品　克明
栗林　貞夫
栗林　重夫
栗林　貞一
栗林　洋
小池　和男
小城　一廣
小島　道夫
小林　圭次
小松原　金二
笹川　一雄
佐藤　純一
佐藤　進
佐藤　吉雄
茂泉　喜彦
重野　行甫
品田　茂博